

特集

3 新課程2年目の学校づくり

— 未来を生きる力を育むために

4

総論

新課程の趣旨を踏まえ自校に必要な重点項目を定める

東京福祉大教育学部 池田芳和 教授

東京都豊島区立さくら小学校 関口純一 校長

10

学校事例1

言語活動を取り入れた授業で
自分の考えを伝える力を育む

広島県神石高原町立油木小学校

14

学校事例2

道徳を体育や生活指導と関連付け
「ルールのしぐさ化」を目指す

東京都豊島区立さくら小学校

18

学校事例3

ICT 機器で学び合いを促し
子どもの考えを更に深める

山形県寒河江市立高松小学校



22

展望

将来必要になる力から逆算し 今、実践すべき教育を考える

玉川大教職大学院教授、国立教育政策研究所名誉所員 小松郁夫

連載

1

私を育てたあの時代、あの出会い

「教育とは人を信じ抜くこと」新任校での日々が信念を生んだ

鹿児島県志布志市立香月小学校校長◎尾場瀬優一

26

パワーアップ! 授業研究

若手教師の指導力を高める工夫

大阪府大阪市立清水丘小学校

28

つながる学校と家庭の学び

夏休みも継続する学習習慣を保護者と教師の連携で目指す

滋賀県草津市立南笠東小学校

32

読者のページ Reader's VIEW / 編集後記

私を育てた
あの時代、あの出会い

第8回

「教育とは人を信じ抜くこと」 新任校での日々が信念を生んだ

鹿児島県 志布志市立香月小学校校長 尾場瀬優一 OBASE YUICHI

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で子どもを育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、尾場瀬校長が語る。

間違いを排除せず
正しい道に導くのが教育

初任校は、現在校長を務める香月小学校でした。着任のあいさつをした時に諏訪校長からいただいた言葉を、今でもはっきり覚えています。「自分の考えを信じて思い切り教育をしてください。先生が失敗した時に責任を取る係として私がいまこうおっしゃいました。「私は何もしないので皆さん、頑張ってください。皆さんの頑張りを信じています。もちろん、校長は何もしないわけ

ではありません。ある時、理科の授業で夜に星の観察をする計画を立てました。「夜に授業は出来ない」という言葉と共に校長が提案してくださいました。「PTAが親子の星座観察会を開いたら指導者として協力できるか」ということでした。全校児童を対象として企画された星座観察会は、大成功に終わりました。子どもたちに「本物」を通して学ばせることは、さまざまな工夫をすれば実現できることを私は学びました。校内でビー玉遊びが流行し、その対応を巡って教師間で意見が分かれた時には、諏訪校長は最後まで現場



おぼせ・ゆういち 専門教科は理科。金峰町立（現南さつま市立）白川小学校、鹿児島県総合教育センター研究主任などを経て、現職。酪農教育推進委員会九州地区委員長、ソニー科学教育研究会鹿児島支部長（2012年5月～）なども務める。

1977（昭和52）

新採として
志布志町立
（現志布志市立）
香月小学校に赴任。
諏訪校長と出会う



香月小学校の先生方と。
前列右から3番目が
諏訪校長、
2列目の左端が
尾場瀬先生

1986（昭和61）

鹿児島大教育学部
附属小学校教官に着任

1998（平成10）

酪農教育ファーム
推進委員会の
専門委員に就任し、
酪農を通じた命の教育の
普及に尽力する

2003（平成15）

南種子町立中平小学校に
校長として赴任

2007（平成19）

三島村立片泊小中学校
に赴任

2010（平成22）

志布志市立香月小学校
に赴任

*プロフィールは取材時（2012年3月）のものです

「信じる、とことん信じる それしか教育の方法はない」



と教育活動に専念でき、私は教育的に必要なことは絶対に行うという信念を抱くようになりました。

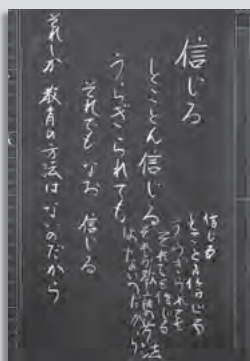
学校が人間教育の場で あり続けるように

これまで、私は問題行動を起こす子どもとも多くかかわってきました。彼らに1日の出来事などを聞いて、「自分の人生を無駄にするなよ」と語り掛ける。子どもの気持ちが上がって、学校に来たと思ったら問題行動を起こす。この繰り返しでした。でも、私は子どもたちを信じ、粘り強く語り掛けました。たとえ裏切られても、子ども自身がより良くなりたい、変わりたいと思うようになることを願い、教え続けるのが教育だと思っております。

実は、ビー玉遊びの件では、ルールを説明した2週間後に約束を破った子どもが出て、結局、禁止となりました。結果的には同じでも、私は最初から禁止にしないでよかったと思っております。なぜルールが必要なのか。一度は子どもに考えさせることが出来たからです。こうした体験の積み重ねが、心を育てることになると思います。

何十年の時を経て、私は初任校に校長として戻ってきました。かつて諏訪校長がされていたように、私は自分の信念を伝え、後は先生方を信じて、全てを委ねています。若手の先生も多いので、経験不足から失敗をすることもあります。でも、間違いを決して非難せず、これからどうすればよいのかを一緒に考え、サポートするようにしています。信じられていると思うからこそ、人間は変われるのであり、相手を信じようとするのだと思います。人は、命令や法によって動くのではなく、意気に感じて動くのだと考えます。

私は、学校経営をただ単に円滑に進めたいと思っではありません。山あり谷あり、それでもよいのです。学校が、子どもはもちろん、教師も含めて人を育てる人間教育の場であり続けるように、学校づくりをしていきたいと思っております。



校長室の黒板には尾場瀬校長が書いた信条があり、そばに子どもがならって書いた言葉が並ぶ

の教師に判断を委ねようとされまして。子どもが夢中になりすぎて授業に支障を来すようになったためビー玉遊びを禁止すべきだ、という意見に対し、私は「禁止にすれば問題はなくなるが、子どもの教育は成立していません。単に禁止するだけでよいのですか」と猛反対をしました。人間は、行動することで間違うことがある。しかし、それを排除するのではなく、正しい道に導くことが学校がすべき教育だと思っております。

議論は平行線をたどり、業を煮やした私は「教育の場で教育をしないのなら、教育者を辞めます」と辞表を出しました。すると、諏訪校長は「尾場瀬先生の言うことにも一理あります。ルールを守るなら遊んでよいと、全校朝会で尾場瀬先生に語ってもらってはどうか」と提案されました。教師たちの意見はましまり、全校朝礼を経てルールの下でビー玉遊びは続けられました。

諏訪校長の下で、教師は伸び伸び

特集

新課程2年目の 学校づくり

— 未来を生きる力を育むために

新課程の全面実施2年目となった。

1年目を振り返り、2年目に大切にしたいポイントは何か。

また、子どもたちに未来を生きる力を育むために、

どのような取り組みができるのか。

識者と校長の対談や学校事例を基に考えたい。

総論

Benesse 教育研究開発センター
「新教育課程に関する調査」の結果を
見ながら新課程1年目を振り返り、
2年目に大切なポイントについて
識者と校長が対談

p.4～9

学校事例

①～③

新課程を踏まえて、
子どもたちに未来を生きる力を
育むための各小学校のビジョンと
その具現化のための
取り組みを紹介

p.10～21

展望

10年後、20年後の社会の変化に
応じた力を子どもに付けるために、
小学校の役割はどのように
変わっていくべきなのかを
識者が提案

p.22～25

新課程の趣旨を踏まえ 自校に必要な重点項目を定める

2011年度に新課程は全面実施となった。ベネッセ教育研究開発センターが実施した

「新教育課程に関する調査」の結果で、新課程1年目を振り返りながら、全国連合小学校校長会会長を務めた経験もある東京福祉大の池田芳和教授と、東京都豊島区立さくら小学校の関口純一校長に、2年目に大切なポイントを整理してもらった。

●新課程1年目を振り返って

**教科書の厚さに気を取られず
子どもの理解度に目を向ける**

——新課程の全面実施1年目が終わりました。授業時数や指導内容の増加によってさまざまな影響が出ると予想されていましたが、学校現場で何か変化は感じられましたか。

関口 新課程はそれまでの指導を見直し、より良い指導にするチャンスです。「学校全体で変わるんだ」という方向に教師の意識を高めていくことが大事であり、校長として注力してきました。本校は2009年度の先行実施前から新課程に関する校内研究を進め、先生方が新課程の趣旨を十分に理解して授業を

行えるよう準備を進めてきました。そうした成果もあり、先生方一人ひとりに心構えがあったはずですが、新課程に対する戸惑いなどは見られませんでした。

池田 先行実施前の08年度には、全国連合小学校長会と文部科学省の連名で「新学習指導要領の先行実施に向けた準備チェックリスト」を文部科学省のウェブサイトに掲載しました。「平成21年度から算数、理科で追加される指導内容を理解している」「平成21年度の指導計画を見直した」といった項目であり、これらが出来ていれば新課程にしっかり対応できたはずですが、実際に授業を進めてみるとうまくいかない部分も出てきたと思います。

「新教育課程に関する調査」概要

- ◎調査テーマ：新教育課程全面実施初年度(2011年度)の1学期における小学校の取り組みと教員の学習指導の実態と意識
- ◎調査方法：郵送法による質問紙調査
- ◎調査時期：2011年6～7月
- ◎調査対象：全国の公立小学校の校長および教員。校長245人(配布数1,000通、回収率24.5%)、教員868人(配布数6,000通、回収率14.5%)

出典の調査データは、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます

<http://benesse.jp/berd/>>「調査・研究データ」

*本調査では同時に学校の授業に対する保護者の意識も調査しているが、今号では校長・教員調査の結果を抜粋

——ベネッセ教育研究開発センターが11年6～7月に実施した「新教育課程に関する調査」では、年間指導計画よりも「遅れている」という回答が国語で目立ち、学年では5年生で「遅れている」と回答した教科が多くありました(図1、2)。これについてどう捉えられますか。

関口 本校での指導の状況から考えると、指導内容が増えたため、計画より遅れる部分が出ていたのかもしれませんが、先生方には、どうしても教科書を全て教えなくてはという意識が強くなる中、新課程になって教科書が厚くなったため、時間が足りません。「教科書を教える」のではなく、「教科書で教える」という意識の転換が必要なのですが、なかなか

新課程2年目の学校づくり——未来を生きる力を育むために

東京福祉大教育学部
池田芳和 教授

いけだ・よしかず◎東京都の公立小学校教諭、東京都教育庁指導部初等教育指導課長、東京都の公立小学校長などを経て、現職。全国連合小学校長会長、中央教育審議会初等中等教育部会臨時委員なども歴任。主な著書に『特別支援教育 改訂指導要録記入の実際と文例集』（共編著／明治図書出版）がある。



東京都豊島区立さくら小学校
関口純一 校長

せきぐち・じゅんいち◎東京都の公立小学校教諭、東京都教育庁指導主事などを経て、現職。豊島区立さくら小学校◎児童数は344人。目指す子ども像に「豊かな『かわり』の中で凛として輝くさくらの子」を掲げて教育活動を推進する。

か難しい側面もあります。

池田 先生方は真面目ですから、教科書を漏れなく教えるという意識が強いのかもしれません。また、遅れた要因は学年や教科の特性にもあると思います。例えば、5年生になると学習内容が難しくなるので、理解をしつかりさせるためには丁寧に見える必要が出てきます。更に、5年生は思春期にさしかかる時期のため、子どもと教師の信頼関係を築くことがより重要になり、生活指導に割く時間が多くなるという事情があると思います。また、国語では新課程で強調されている言語活動を重視しているために活動の時間が増え、その結果、授業が遅れがちになったのかもしれません。

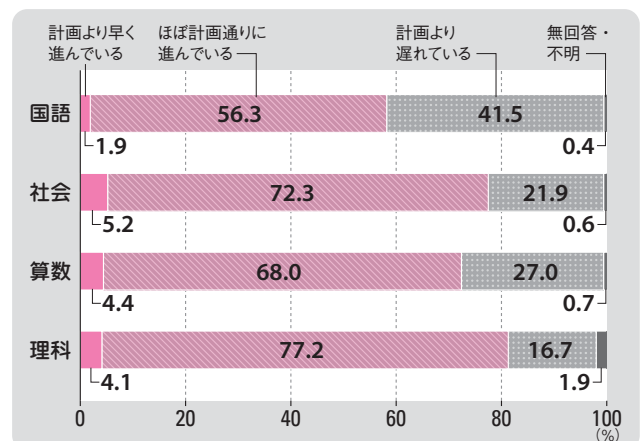
——年間指導計画の遅れへの対応としては、「全体的に授業の進度を速める」という回答がどの教科も多く見られました（P.6図3）。**池田** 調査結果では、若手教師ほど進度を速めて対応する傾向が見られました（P.6図4）。新課程では、基礎的・基本的な知識・技能の習得のために繰り返し学習が強調され、習得、活用、探究の学習による思考や理解の深まり、学習意欲の向上が求められています。本来、「この知識は身に付けているから、これを生かして次の事項に発展させよう」「この公式は理解しにくいから、時間を掛けて定着させよう」など、子どもの状況を見極めて軽重を付けた指導をするのが望ましいのです。

図2 年間指導計画からの遅れ(学年別・1学期時点)

	1年生 (136)	2年生 (121)	3年生 (128)	4年生 (132)	5年生 (136)	6年生 (141)
国語	27.9	38.0	52.3	49.2	51.9	33.6
社会			14.6	10.9	36.7	26.4
算数	19.5	44.1	23.6	33.6	26.5	16.5
理科			7.5	19.8	21.3	20.0

注1) 「計画より遅れている」の%
注2) 30%以上の数値にアミカケをしている 注3) () 内はサンプル数
出典／Benesse 教育研究開発センター「新教育課程に関する調査」(2011)

図1 年間指導計画の実施状況(全体・1学期時点)



出典／Benesse 教育研究開発センター「新教育課程に関する調査」(2011)

*プロフィールは取材時(2012年3月)のものです

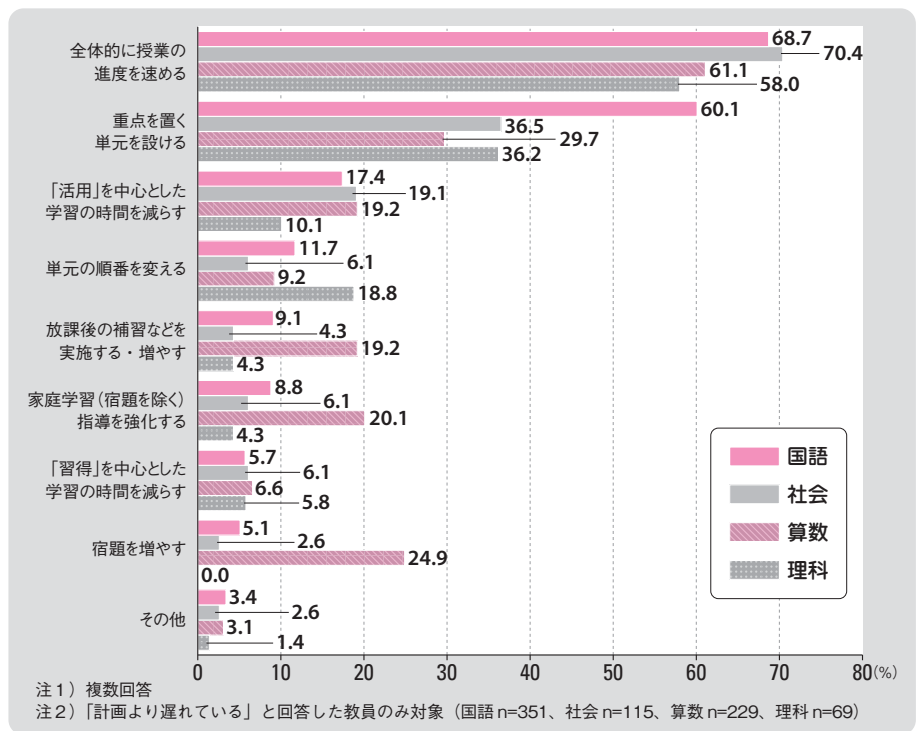
が、このような授業は指導技術や教材の深い理解などが必要なため、経験が浅い先生には難しく、進度を速めることに頼ってしまうでしょう。

関口 先生方の授業を見てみると、単元全体の授業計画は同じでも、教師によって授業のつながりが円滑な場合と、一つひとつの授業でぶつぶつ切れている場合が見られます。教えるべき内容を系統的に理解した上で、例えば、既習事項は模造紙に書いておき、授業ではそれを黒板に貼って確認すれば、板書をするよりも授業にロスが少なくてすみます。そうした工夫の積み重ねが子どもの理解にも大きく影響すると考えます。

——算数では遅れの対応として「宿題を増やす」が目立ちます(図3)。

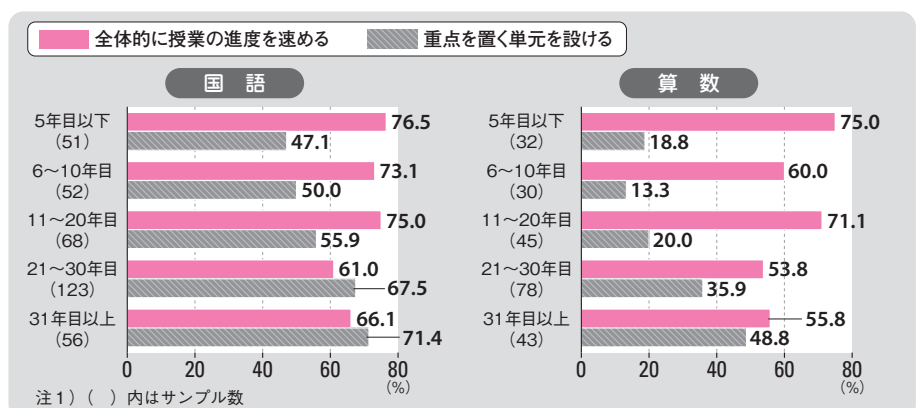
関口 算数では習熟が重要ですから、従来からよく宿題が出ていた教科です。授業だけでなく、授業で解き方を指導し、家庭でドリル学習をするという指導スタイルが新課程によって強化されたのかもしれませんが。家庭学習習慣の定着という観点からも、授業と家庭学習

図3 年間指導計画の遅れへの対応



出典 / Benesse 教育研究開発センター「新教育課程に関する調査」(2011)

図4 年間指導計画の遅れへの対応(教職経験年数別)



出典 / Benesse 教育研究開発センター「新教育課程に関する調査」(2011)

の連携は考えたいものです。

池田 進度が遅れているのは表面的な問題であり、そこにとらわれて授業を無理に進め、子どもの理解が十分でなくなるの方が問題です。関口先生がお話された通り、子どもの理解を深めるためには「教科書で教える」ことが重要であり、学年団や学校全体で話し合い、どこにポイントを置くのか共有すると

よいと思います。学校として足並みをそろえられるように、担任の力量による差が抑えられるでしょう。少子化の影響で単学級、小規模化となる学校が今後増えると予想されますが、校内で組織的な対応が難しい場合、地域の学校で集まって連携することも必要なのではないでしょうか。

——子どもの変化として、「児童間の学力格

新課程2年目の学校づくり——未来を生きる力を育むために

「差」が大きくなったという回答が多い点も気になります(図5)。

池田 確かに気になる結果ではありますが、人が持つ能力には皆、違いがあり、どの時代にも子どもの学力差はあると思います。差があることばかりに目を向けるのではなく、現状から学力下位層の子どもへの手立てを考え、全力で指導することが重要です。

関口 学力下位層への対応は、本校では以前からの大きな課題です。授業が分からないまま学年が上がっていくと、授業が面白くないから参加しなくなり、学校不応を引き起こすことになりかねません。本校は、新課程全面実施を機に時間割を見直し、月1回程度の土曜授業や、毎日15分のモジュール授業を設けるなどして、毎日の授業のリズムは以前と同じようにしながらも、週1コマ分の補習時間を設けました。特に支援すべき子どもについては、保護者の了解を得て補習をする場合もあります。今まで通りの手厚い指導を続けていきたいと考えています。

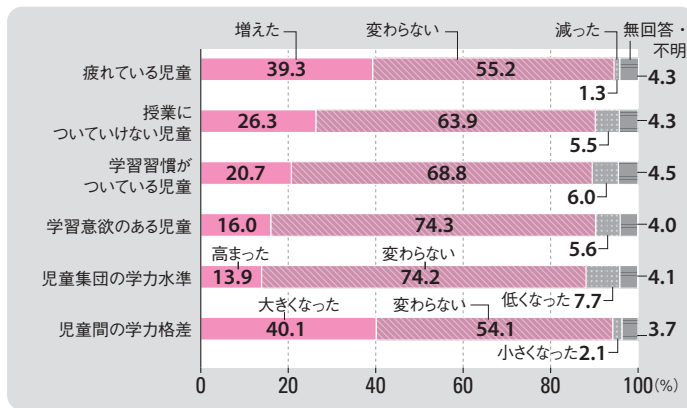
●2年目に大切なこと

**自校での1年目を振り返り
力を入れる教育活動を考える**

——新課程1年目の状況を踏まえ、2年目にはどのようなことが大切になるでしょうか。

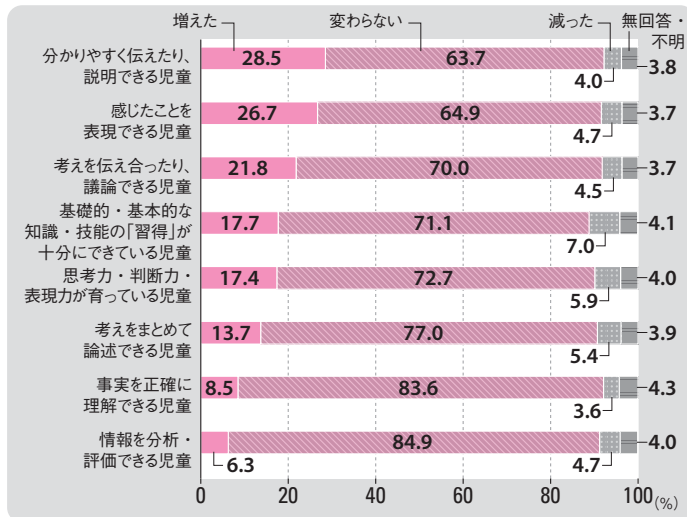
池田 確かな学力、健やかな体、豊かな心。

図5 児童の変化(疲れ、授業理解、学習意欲、学力格差など)



出典／ Benesse 教育研究開発センター「新教育課程に関する調査」(2011)

図6 児童の変化(思考力・判断力・表現力等の育成にかかわる学習)



出典／ Benesse 教育研究開発センター「新教育課程に関する調査」(2011)

学校は子どもの生きる力を育む場です。この根本は不変である一方、社会の変化に応じて求められる力が変わることもあります。そうした変化に応じた教育をするために、学習指導要領は改訂されるのです。現代は知識基盤社会であり、コミュニケーション能力、問題解決能力、思考力、論理力などが求められています。普遍的に求められる生きる力を意識しつつ、未来を生きる子どもに必要な力を付けるために、学校の指導も変わっていく必要があるのではないのでしょうか(図6)。魅力ある教育を行う学校は、子ども、保護者、地域から信頼されるでしょう。

関口 その通りだと思います。どの学校も十分に計画を練り、校内研究を重ねて新課程に臨み、課題を抱えつつも前進していることと思います。だからこそ、「新課程はもう走り始めた。このまま進めば安心」というのではなく、新課程の趣旨を忘れずに取り組むことが肝要だと考えます。1年目は緊張感もあり、どの先生も意識を高く持って取り組むものです。しかし、慣れてくると、そうした緊張感や意識は薄れがちです。2年目以降も1年目と同じ意識で取り組むために、校長の役目として、今一度、新課程の趣旨を意識させるよう訴えることが必要だと考えます。私は、毎



年1月の職員会議で次年度の教育課程編成の方針を出しますが、12年度は方針の1つを「新課程の趣旨を踏まえて、今まで工夫し実践してきたことを、継続し、充実させ、発展させる」としました。1年目と同じような意識でありながらも、教育活動を今以上に良いものとしていきたいからです。

池田 確かに、先生方が地に足を着けた指導をするためにも、校長がぶれない方針を出す

ことは重要です。子どもの実態、学校の状況はもちろん、地域の思いや要望も含めて、自校に求められている教育は何か。「生きる力」の育成を目標としつつ、自校の1年目の状況も踏まえ、力を入れる事項を見極め、大局的に学校の方針を考えて、打ち出す必要があると思います。

——具体的な指導面でポイントとなるのは、どのようなことでしょうか。

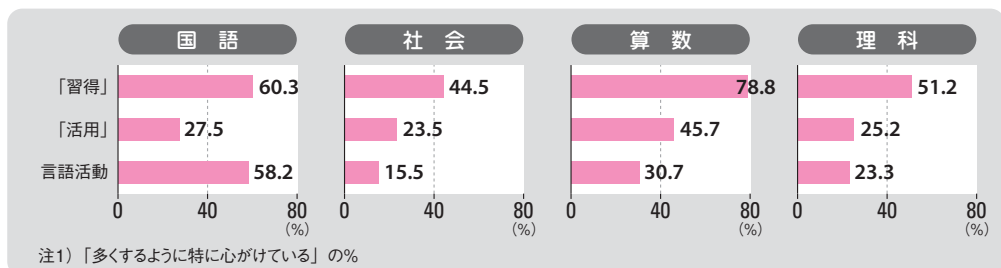
池田 新課程では「習得」「活用」「探究」の連動が強調されています。この3つの学習活動をそれぞれ指導することに先生方は慣れていますが、系統的、継続的に行うとなると、どのように授業に取り入れればよいのか難しいと感じる先生はまだいると思います。一例ですが、算数で三角形の内角の和が180度であることを活用して多角形の内角の和を考えさせる指導があります。このことから、中学生の学習内容であるn角形という一般式を意識した指導が考えられます。「習得」の観点は十分心掛けているのですから(図7)、それらを子どもたちの思考力や活用する力を伸ばすという観点から組み立て直せばよいのではないのでしょうか。

関口 校内研究をしている学校の先生であれば「習得」「活用」「探究」の連動は意識できると思いますが、そうでなければ、そうした意識は浸透しにくいのが現状です。3つの学習活動のバランスを取るのが難しく、教科書

や指導書に即して授業を進めがちです。

池田 前回の改訂時には、生活科で体験をたくさんさせるようにしました。単に活動するにとどまり、子どもの気付きや発見などを学びに結び付けられていかなかったという反省がありました。子どもに体験して見たこと、感じたことを表現させて、気付きや考えに結び付け、更にそれらを発表させて、子ども同士の学び合いに発展させる。新課程で重視されている言語活動についても、活動を単体で終わらせずに、目的をしっかりと見据えて活動を連動させてほしいと思います。

図7 授業における「習得」「活用」、言語活動への心がけ



出典／ Benesse 教育研究開発センター「新教育課程に関する調査」(2011)

新課程2年目の学校づくり——未来を生きる力を育むために

——新課程では発達段階に応じた指導も重視されています。

池田 中教審の答申では、「生活に必要な知識は低学年までにしつかり指導すべき」ということが示されました。中・高学年で深めて発展させていく上で共通の基盤となる力や姿勢は、低学年で習得しておくことが望ましいというわけです。例えば、低学年ではたくさんの本を読み、文章に慣れ、言葉で考え、感想を表現するなどの言語活動をしており、中学年以降、相手を説得する、抽象的な問題について考えるなどの学習に発展させていくことが考えられます。

関口 先生方は目の前の子どもを見て指導していくので、自分がどの発達段階の子どもを教えているのかという視点が薄れがちです。池田先生の話がうかがい、発達段階を見通しながら、どのような力を付けるべきかを考えて指導する重要性を改めて実感しました。

池田 発達段階に応じた指導は、教科学習に限りません。係活動などにおいても、低学年のうちから役割を任せ、出来たら褒めて感謝する。例えば、小学1年生で、幼稚園時代は年長さんとして出来ていたのに、小学校では一番下の学年となったことでその役割を奪われてしまうことがあります。教師間で共通理解をし、出来ることを次の学年でも引き継ぎ、継続的に積み重ねていくことが、子どもの自立を育んでいくのです。

●校長の役割は何か

校長自らが新課程を十分に理解し方針と具体策を打ち出す

——新課程について保護者への対応はどう考えられていますか。

関口 新課程の趣旨と本校の対応について、保護者にもっと発信していきたいと考えています。既に学校だよりや保護者会で説明していますが、し過ぎることはないと思います。

池田 保護者は、学校が思う以上に学校から説明を受けたとは捉えていません。文部科学省の調査によると、学習評価に関して「学校から何らかの説明を受けている」と捉えている保護者は約57%で、学校が「保護者に何らかの説明を行っている」とした約93%と大きな差がありました。保護者と学校の意識の差は大きくあるものとして説明すべきでしょう。

——新課程2年目の学校づくりにおいて、メッセージをお願いします。

池田 子どもが明日も来たいと思う学校、保護者から信頼される学校をつくるのは、教師一人ひとりの努力の積み重ねです。多くの校長先生が実感されていると思いますが、先生方は真面目で一生懸命に子どもと向き合っています。そうした一人ひとりの頑張りや良さを認め、先生が子どもとしつかり向き合う環境を整えてほしいと思います。特に都市部では若手教師が増えており、教師の育成は校長

の役割として重要度が増しています。例えば、若手教師の学級の保護者会で校長としてあいさつをし、先生への要望や不満は校長や先生に直接言ってほしいと伝えてください。保護者が先生に不信感を抱いていると子どもが察知したら、子どもと教師の信頼関係が失われてしまいます。そうしたことを防ぐため、教師としての成長を手伝ってほしいと伝えるのです。うまくいかなかったことは隠さずに認め、校長や教頭が支援する。そうしたことが学校への信頼を高め、先生方も自信を持って子どもと向き合えるのではないのでしょうか。

関口 私は、校長自らが新課程を十分に勉強し、方針や具体策を出すことが重要と考えます。校長の言うことが毎回違うようでは、先生方はどう動けばよいのか分からず、校長を信頼できなくなり、ひいては学校全体が停滞してしまうからです。どのような子どもを育てたいか、こういう子どもに育ててほしいという「ぶれない願い」を、常に先生、保護者、子どもたちに発信していきたいと思えます。

池田 教師主導から子ども主体の授業への転換は、1970年代中頃から言われ続けてきたことで、この数年でやっと浸透してきました。指導の質的転換は時間が掛かるものであり、新課程はまだ2年目です。一度に全てを変えられるわけはありません。新課程で強調された点をしつかり踏まえ、地道に工夫と改善を積み重ねてほしいと思います。

言語活動を取り入れた授業で 自分の考えを伝える力を育む

広島県 神石高原町立油木小学校

神石高原町立油木小学校は、新課程に先駆けて言語活動に取り組んできた。2011年度は、子どもの実態を踏まえ、国語科を中心に据えて取り組みを続けた結果、課題であった分析力や論理構築力が高まったという。

未来を生きる子どもたちに 付けたい力

自分の考えを論理的に組み立てる力

社会に出れば必ず出会う、
多様な考えや価値観を持った人に、
自分の考えを伝える力

新課程を踏まえ 大切にしている取り組み

- ◎算数の取り組みで伸ばしてきた論理的に考える力を基に、研究教科を国語にして、文章を論理的に読み解き、組み立てる力を付ける
- ◎国語や他の教科で、学んだことを活用して表現する
- ◎全教師が研究授業を年3回行うことで、取り組み内容を学校全体に浸透させる

◎背景

自分の考えを分かりやすく
表現できるようになってほしい

神石高原町立油木小学校は、広島県と岡山県の県境の山間部に位置する単学級校だ。子ども同士の仲は良いが、固定された人間関係の中で育つためか、知らない人には言いたいことをうまく伝えられない傾向が見られた。

そこで、2005年度に広島県教育委員会から「ことばの教育」のパイロット校に指定されて以来、「論理的に考える力の育成」をテーマに校内研究に取り組み、どの教師も研究授業を年3回行ってきた。更に、子どもに

S c h o o l D a t a

◎2005(平成17)年、近隣の4校が統合して開校。毎日の清掃後10分間を言語活動に必要な表現力を育む時間「パワーアップタイム」とし、問答ゲームや絵の分析などで子ども同士が説明し合う活動を行っている。



校長 高石昭文先生

児童数 99人 学級数 8学級(うち特別支援学級2)

所在地 〒720-1812 広島県神石郡神石高原町油木乙1

TEL 0847-82-0926

URL <http://www.jinsekigun.jp/school/yukisho/>

公開研究会 2012年10月10日(水)

新課程2年目の学校づくり——未来を生きる力を育むために

考えを表現する力を付けさせるため、全学年に言語活動を取り入れている。高石昭文校長は、そのねらいを次のように話す。

「子どもにとって友だちは家族のような存在で、自然と互いの気持ち分かるようです。

しかし社会に出れば、自分と価値観が違う人たちと意思を疎通する必要があります。自分の考えを、言葉で誰にでも分かりやすく伝えられるようになってほしいと考えています」

10年度までの6年間は算数を研究教科として取り組んだ。野崎光弘教頭は、同じ教科に固定した理由を次のように話す。

「言語活動は、授業に取り入れるだけで満足しがちです。そうではなく、教科や単元のねらいを達成するためにはどのように言語活動をとり入れればよいか、同じ教科で研究を重ねれば、理解が深まるだろうと考えました」

授業では、1つの問題に対して複数の子どもに答えと式を立てた理由を発表させ、どの考えが正しいかを話し合う時間を増やした。教師は子どもに、「結論を言ってから根拠を挙げる」などの発言の型を示し、それを使って意見を述べるよう指導した。

●取り組み内容 文章を多く書かせ 分析力と論理構築力を育む

算数の研究を始めて2〜3年で、子どもの様子に変化が表れた。ただ答えを言うだけ

だった子どもが、なぜその式を立てたのかを順序立てて説明できるようになり、他教科・領域でも積極的に発言し、友だちと意見を交換するようになった。

しかし一方で、文章を読み取って論理的に自分の考えをまとめたり、自分の意見を文章で表現して他者に伝えたりすることには課題があったという。文部科学省の「全国学力・学習状況調査」では、記述問題の正答率が低く、無回答の子どももいた。誤答を分析したところ、何が問われているかを正しく把握したり、グラフなどから必要な情報を取り出したりする「分析力」と、条件に合わせて文章にまとめるなどの「論理構築力」をしっかりと伸ばせていない様子が見て取れた。

そこで、11年度は研究テーマをこれまで通り「論理的に考える力の育成」としつつも、研究教科を国語に変えた。説明文を中心に、分析力と論理構築力の向上に力を入れ、研究授業では、2つの力をどのように高めるかを明記して指導案を作った。普段の授業でも、起承転結などの文章構造に注目させる発問を増やす、子どもに文章から根拠を見付けて発言させるなど、指導を工夫した（P.12図1）。文章を書く力も育むため、6年生では習ったことを生かし、単元末に説明文を書かせたり、絵の分析をさせたりした。鳥獣戯画に関する文章を読んだ時は、子どもが好きな絵についてその理由を800字程度で書き、互い

神石高原町立油木小学校校長
高石昭文 たかし・あきふみ
「精神一到、何事かならざらん。努力すれば不可能も可能になることを、自分の行動によって子どもに示したい」

神石高原町立油木小学校教頭
野崎光弘 のぶき・みつひろ
「将来どこに住むようになっても、自分の地域に誇りを持つて子どもを育てたい」

神石高原町立油木小学校
指導教諭、研究主任、6学年担任、子ども一人ひとりが楽しく、主体的に参加できる言語活動を広げていきたい」
高延恵 こうのべ・めぐみ

神石高原町立油木小学校
教務主任。「子どもが教え合い、学び合って、共に成長していけるような関係づくりをしていきたい」
藤井博敏 ふじい・ひろとし

に読み合い、感想を付せんに書いた（P.12写真1）。指導教諭・研究主任で6学年担任の高延恵先生は、このねらいを次のように話す。「友だちの文章をただ読むだけでなく、友だちがどのような表現の工夫をしているのかを意識してほしいと思いました。それを付せんに書けば、自分の感想をコンパクトに分かりやすく伝える練習にもなると考えました」
国語以外の教科・領域でも、子どもの分析力や論理構築力を伸ばすための活動を積極的に取り入れた。例えば「総合的な学習の時間」では、調べ学習をレポートにまとめる宿題を

*プロフィールは取材時（2012年3月）のものです

図1

国語の1時間の授業における言語活動で育成する力のイメージ図



*同校の資料を基に編集部で作成

出し、考えを文章で表現させた。また、算数では、しっかり読解させるために応用問題の問題文を長くしたり、知識を活用させるため

り組む必要性を、教務主任の藤井博敏先生は次のように話す。「分析力や論理構築力は全ての教科・領域

子どもを軸にした研究を始めて1年が経ち、

国語の教科特性を踏まえ 課題を解決していく

で求められます。国語での学びを、他の教科・領域でも生かしたいと考えました」

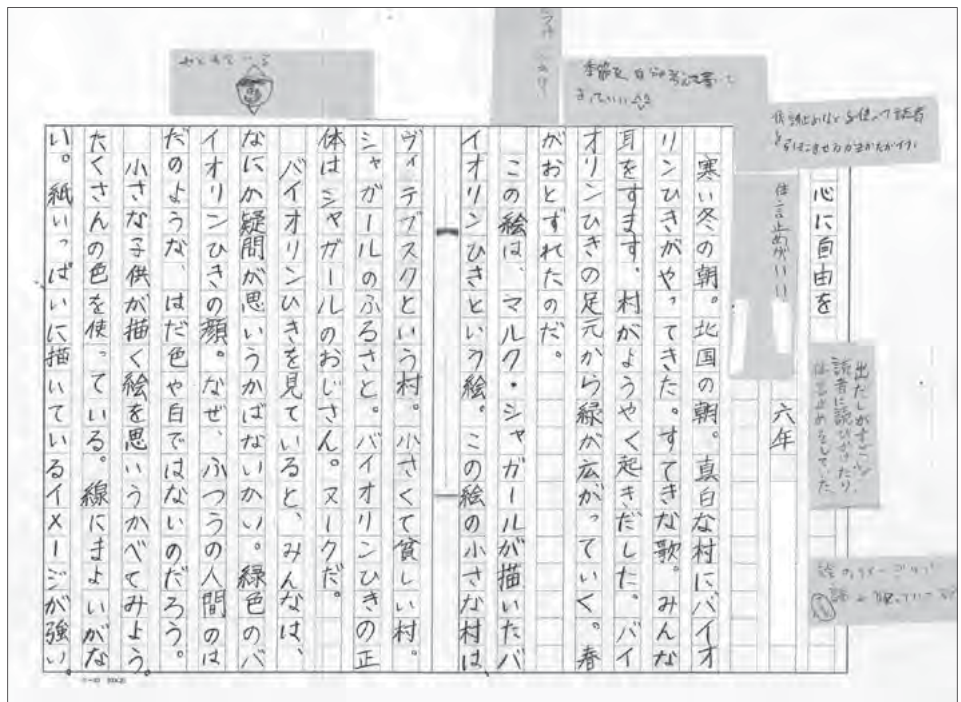


写真1 自分の好きな絵についての作文で、マルク・シャガール作「青いバイオリン弾き」の感想を書いた。図1の「根拠を明らかにして表現」「筆者の表現の工夫を生かして表現」の部分に当たる

新課程2年目の学校づくり——未来を生きる力を育むために

る。「全国学力・学習状況調査」では記述問題の正答率が上がり、無回答も少なくなった。

「問題文が長くても、文意を正確に把握できるようになったと思います。記述内容から、問われたことに過不足なく答えようとする姿勢を感じます。友だちの作文を読むことで、分かりやすく書くにはどうすればよいかを考えられるようになったのでしよう。また、子どもの表情からは、作文を書くことを楽しんでいる様子も見取れます」(高延先生)

一方、12年度に向けて課題もあると、藤井先生は話す。

「国語の研究は始まったばかりです。説明文で行ってきた分析力や論理構築力を高める指導を、小説や詩の単元にも広げられるよう、指導法を考えていきたいと思います。12年度以降は授業を今まで以上にじっくり振り返れるよう、研究授業の授業録を作成することを提案しています」

高延先生は、どの子どももしっかり文章を読み取れるよう指導を工夫したいと話す。

「読解に課題がある子どもには、文章のどこに注目すればよいかといったヒントを出すなど、個に応じた手立てを厚くしたいと思います。また子どもは、友だちの考えから多くのことを学びます。深く読んでいる子どもが読み方を友だちに伝えるなど、子ども同士の考えをつなぐようにしたいと考えています」

高石校長は、語彙力を付けるために辞書引

き学習法を取り入れたいと話す。

「豊かな表現力を付けるためには、自在に使える言葉を増やす必要があります。1年生から辞書を引かせ、高学年では更に知的好奇心を刺激するために、大人向けの国語辞典や漢和辞典の活用も検討しています」

●学校経営の工夫

不慣れな教師にも手厚く指導し 教師全員で活動に取り組み

教師全員による研究体制も同校の特徴だ。各学期1人1回行う研究授業では、事前・事後の検討会を必ず実施している。新採の教師や言語活動に不慣れな教師に対する研修も手厚く、4月には研究主任が模範授業、研究授業前には管理職も参加する模擬授業を行う。

「ただ『言語活動をしてください』と言うだけでは、経験のない先生は戸惑うはずですから、ベテランがしっかり支援することが大切です。本校の良い伝統を次世代に伝えていきたいと考えています」(野崎教頭)

高石校長は、教師が1つにまとまることを重視して学校運営に当たっていると話す。

「子どもによって課題は異なりますから、先生方から子どもの様子を聞くことを大切にしています。本校はこれまでも、研究授業などで浮かび上がった課題を事後検討会や職員会議で共有し、改善してきました。こうした積み重ねによって、子どもの思考力や表現力

を伸ばせているという実感をどの先生も抱いていると思います。今後とも私が見通しを持つた上で、努力を惜しまず、全員で取り組んでいきたいと思っています」

学校をつくり、動かすチームワーク

校長の役割

教務主任や研究主任を始め、意欲的な先生がいたからこそ、本校では言語活動の取り組みを継続してこられました。校長として、そうした学校を背負って立つ先生を1人でも増やす責任があると考えています。もっとも、私が目指す指導を押しつけてしまっただけは何にもなりません。先生方一人ひとりの個性を大切に、良いところを伸ばしていきたいと思っています。

校長 高石昭文先生

ミドルリーダーの役割

研究主任の役割の1つは、先生方の模範となる言語活動を行うことだと考えています。十分に準備をして授業に臨むことを心掛け、時間を見付けては若手の先生の授業を見学するようにしています。私が気付いたことはアドバイスしますし、私が若手の先生の授業から学ぶこともあります。自分の指導に満足せず、より良い指導を目指したいと思っています。

研究主任 高延恵先生

道徳を体育や生活指導と関連付け「ルールのしゅくさ化」を目指す

東京都豊島区立さくら小学校

新課程では、道徳の時間を要として道徳教育を教育活動全体で取り組むことが明記された。豊島区立さくら小学校では、体育科や生活指導と関連付けながら、道徳的な行為を習慣化させることによって、心が豊かなものとなるように活動を工夫している。

未来を生きる子どもたちに 付けたい力

自己を確立して、社会的自立を図れる力

健全な自尊感情の下、高い志を持って、
凜として輝ける力

異質であることを互いに認め合った上で
助け合える力

新課程を踏まえ 大切にしている取り組み

- ◎道徳を柱に、体育科と生活指導に関連付けた道徳教育を展開
- ◎体育の授業では、ゲーム学習を中心にルールの順守や集団参加の道徳性を育む
- ◎生活指導では、道徳の理念だけでなく、形としての実践を重視。児童の発案により生活のルールを定める

◎背景

豊かな心を育むことが 学力を高めるための基盤

豊島区立さくら小学校の校区には、電車で数駅しか離れていない繁華街とは対照的に、静かな住宅街が広がる。大手企業の社宅などもあり、私立中学校への進学者は学年の約3割を占める。関口純一校長は子どもたちの様子を次のように語る。

「本校の児童の良い面は、基本的な生活習慣や学習習慣が身に付いていることです。一方、人とかかわる体験が不足しがちなところがあります。家庭での生活習慣に加え、学校

S c h o o l D a t a

◎豊島区立千川小学校と豊島区立大成小学校が統合して2002年に開校。06年度から2年間は国語教育、08年度からは文部科学省や豊島区教育委員会の研究指定を受けて道徳教育を研究している。



校長 関口純一先生

児童数 344人 学級数 12学級

所在地 〒171-0051 東京都豊島区長崎6-16-1

TEL 03-3956-8164

URL http://www.toshima.ne.jp/~sakura_e/

公開研究会 未定

新課程2年目の学校づくり——未来を生きる力を育むために

という集団生活におけるルールも身に付けさせないといけません。また、保護者の教育への関心は高く、子どもに対する期待が大きいことから、少しストレスを感じている子どももいます。本校としては、子どもが人とかわり合いながら自尊心を高めていくような教育活動を展開したいと考えています」

関口校長は、学校経営の基本方針に「自立」「共生」「愛」を掲げている。自分が自分であることに誇りを持ち、違いを認め合い、共に支え合って生きることの大切さを育んでいきたいとの考えからだ。こうした方針の下、同校では2008年度から4年間にわたり、道徳教育を校内研究のテーマに掲げてきた。

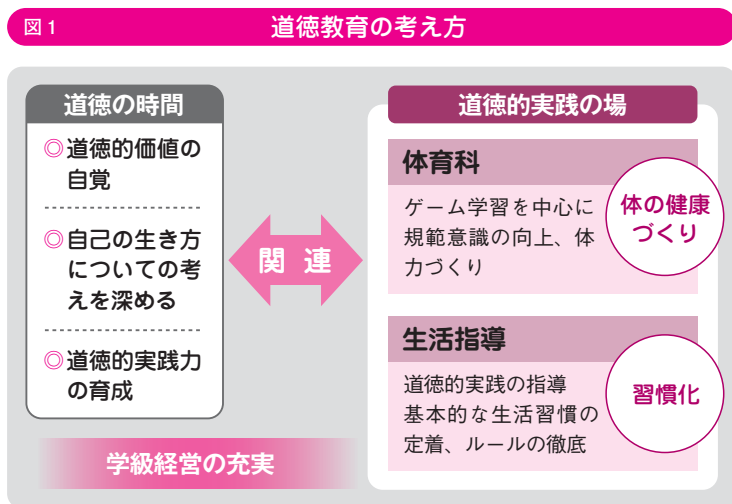
「学校教育で最も大切なのは学力を高めることだと、私は考えています。そのためには、基盤となる生活習慣や学習習慣、そして豊かな心が必要です。集団で生活し、学習する場として、人間関係がぎくしゃくしては学習に集中できません。道徳教育で心を育み、学習にふさわしい環境を整え、学力もおのずと高まると考え、取り組みを進めています」(関口校長)

●取り組み内容 道徳的な行為を子どもが 実践できる形にして習慣化

同校の道徳教育の特徴は、道徳の授業は子どもが道徳的な考え方を身に付ける場、体育

の授業や生活指導は道徳的な行為を実践する場と位置付けて、活動を組み立てている点にある(図1)。

「『道徳教育』イコール『道徳の時間』という意識の教師は多いとは思いますが、学習指導要領に示されているように、道徳の授業を軸として他の教科・領域と関連させて全教育活動で心を育んでいくというのが、本来の道徳教育です。ただし、いきなり全ての教科と関連付けて指導するのは難しいので、本校ではまず体育科と生活指導に絞って、教育活動を進めています」(関口校長)



*同校の資料を基に編集部で作成



豊島区立さくら小学校校長
関口純一 せきぐち・じゅんいち
「教師として大事にしているのは、子どもとしっかり向き合っていて逃げないこと。校長としてブレないこと」

体育の授業では、ゲーム形式の学習を中心に、規範意識や自尊心が高まるような工夫をしている。例えば、ドッチボールのコートの形やルールを子ども同士で話し合っていて決めたり、友だちや自分の良かったプレーをカードにまとめて見せ合ったりしている。

「体育の授業目的の達成度を高めるために道徳教育を取り入れる、という考え方で授業を構成するようにしています。道徳教育を強調するあまりに体力が付かなかつたら本末転倒です」(関口校長)

生活指導では、「さくらのルール」と「さくらしぐさ」から成るルールブックを作成し、全児童・全家庭に配布した(P.16 図2)。

「『道徳教育が大切』ということに異を唱える保護者はほとんどいませんが、心は目に見えませんが、概念的に説明しただけでは子どもも保護者も実感が湧きません。道徳的行為として表面に現れることにも取り組むべきだと考えました」

ルールブックの特徴は、教師だけでなく、子どもの声を反映させている点だ。例えば、あいさつをする時には校帽を脱ぐというルールがある。これは、あいさつは帽子を脱いで

*プロフィールは取材時(2012年3月)のものです

図2 「さくらのルール」と「さくらしぐさ」

さくらのルール

- 1 ガードレールや白線の内側を歩こう。
- 2 歩道橋を渡ろう。
- 3 踏切を渡るときの約束を守ろう。
- 4 登校時刻、下校時刻を守ろう。
- 5 通学路を守ろう。
- 6 登校途中、忘れ物に気付いてももどらない。

- 47 給食は、残さず食べよう。
- 48 感謝して「いただきます」「ごちそうさま」を言おう。
- 49 係や当番は進んでしよう。
- 50 連絡帳や配布された手紙は、その日のうちに家の人に見せよう。

さくらしぐさ

- 1 なかよししぐさ
 - 泣いている子がいたら、なぐさめてあげる。
 - 1人で寂しく遊んでいる子がいたら、自分から「あそぼ」とさそう。
- 2 てつだいしぐさ
 - けがをしている人などの、給食を運んであげる。
- 3 図書室本整理しぐさ
 - 読んだ本を次の人が気持ちよく使えるように、元にもどす。

- 9 ドアしぐさ
 - 後ろの人のためにドアをあけてあげる。
- 10 あいさつしぐさ
 - 廊下でお客さんに会ったときは足をとめて会釈をする。

「さくらのルール」は全部で50。みんなが楽しく仲良く安心して学校生活を送るためのルールとして、子どもたちの声を生かしてつくった。「さくらしぐさ」は人への優しい思いやりが伝わるしぐさとして、子どもからの応募を基につくった

* 同校の資料を基に編集部で作成

するのが礼儀だと知っていた子どもが自発的に始めたところ、子どもたちの間で広がり、ルール化したのだ。

「さくらしぐさ」も子どもたちの意見で出上来上がった。きっかけは、関口校長が全校朝会で「江戸しぐさ」について話したことにある。「雨の日に人とすれ違う時、相手が濡れないように傘を外側にかしげる」など、江戸時代の町民のマナーとして伝わっている江戸しぐさについて話し、「さくら小でも優しさや思いやりが伝わるしぐさはないかな？」と関口校長が投げ掛けたところ、子どもたちから次々とアイデアが出てきた。

このようにしてつくられたルールやしぐさを意識的に実行に移せるように、月や週で重点項目を設定し、取り組んでいる。

目に見える道徳的行為に対して、学校を訪れた人々から「さくら小学校の子どもたちは立派なあいさつが出来る」などと褒められることが少なくない。関口校長は、全校朝会でそうした話を披露するように心掛けていると話す。

「まずはルールを守る行為という形から入り、それが次第にしぐさとして自然に身に付いていくというのが願いです。これを『ルールのしぐさ化』と私は呼んでいます。子どもたちのこうした行為が、地域の方々に理解され、学校の評判が高くなり、子どもたちに還元されていく。その結果、子どもたちの自尊心が高まっていく。ルールブックによって、こうした良い循環が生まれています」

常に新課程の趣旨に立ち返ることが大事

関口校長は、12年の年明けに、次年度の教育課程編成の校長方針を教職員に提示した。12年度は創立10周年を迎えるため、それを軸にして行事などを組み立てていくことを第一の柱に掲げ、更に11年度の施策を継続・発展させていく方針だ。

「新課程移行期間の始まった09年度から、新課程の趣旨をどう教育活動に反映させていくのかを模索してきました。全面实施を待つより先に真剣に考えていかないと、具体的な改善には結び付かないからです。新課程2年目となりますが、まだ十分に趣旨を踏まえていない部分があるはず。小学校教育の節目であることを常に意識して、新課程の趣旨に立ち返る必要があります」(関口校長)

同校は、授業時数の増加については、2つの方策で対応した。1つはモジュール方式の採用だ。週3回、各15分間のモジュールを取り入れ、合計45分の1コマ分を捻出。この1コマでは国語の漢字練習や算数の計算問題といった基礎・基本の繰り返し学習を行っている。2つめは土曜日の活用だ。豊島区は11年度から「としま土曜公開授業」を始めた。これは、原則として月1回、土曜日に半日授業を行うというもので、これらによって生じた2コマ分の時間的余裕を、週1コマの補習の

新課程2年目の学校づくり——未来を生きる力を育むために

時間と、教師の会議の時間に当てている。12年度は、これらの枠組みを継続しつつも、モジュールでの学習内容を見直すなどして、指導内容の充実を図っていく。

このように授業時数を捻出したため、行事は削減せずに内容を工夫している。

「学校行事は教科学習で積み上げてきた成果を発表する機会という原点に立ち返り、学芸会などでの派手な演出は控えるようにし、行事のための練習も最低限に抑えるようにしました」（関口校長）

道徳教育については、4年間にわたり研究を進めてきたため、新課程で新設された「道徳教育推進教師」を中心とした組織的・計画的な体制が整っている。これを土台に道徳教育を更に進化させ、12年度から人権教育の視点に立って進める方針を掲げた。

「人権教育を通じて、子どもの自尊感情を更に高め、教師の人権感覚を振り返るきっかけが出来ると考えています。教師の目に見えないところで悲しんでいる子どもがいるかもしれません。もう一度、自分の言動を見直し、修正すべき点があれば改善されることを期待しています」（関口校長）

●学校経営の工夫

校長が理念だけでなく具体的な方針を示す

関口校長は、学校内のどのような活動につ

いてでも、先生方の意見を大切にしつつ、校長として明確に方針を示すようにしてきたと話す。

「校長が方針を明確に示さなければ、先生方も目指すべきものが見えてきません。子どもたちや教師の様子を見取り、本校が目指すべき目標を示し、それをどのような場面でもブレないようにしてきました。もちろん、先生方は学級の指導で手一杯ですから、校長だけが旗を振ったからといって、それでうまくいくものではありません。示した理念を、主幹教諭や研究主任が多くの先生を巻き込みながら推進していつてくれるからこそ具現化できるのです」（関口校長）

関口校長の専門分野は道徳教育である。新学習指導要領で重点に挙げられており、更に、自身が具体的な方針を示すことが出来るので、道徳教育を校内研究のテーマに設定したと説明する。

「抽象的な理念を示すだけでは、先生方ほどのように指導を進めればよいのか分かりません。新学習指導要領解説の道徳編で『校長の方針の明確化』と明記されているように、校長が理念だけでなく具体的な方策まで示すことが大事だと考えています。自分の得意分野を生かしつつ、子どもたちが大好きといえる学校を、新課程2年目を以降もつくっていきたいと思います」（関口校長）

学校をつくり、動かすチームワーク

校長の役割

先生方が研究の成果を実感できないと、やらされている感や多忙感が高まってしまいます。先生方は真面目ですから、研究よりむしろ子どもたちと向き合っていたいと考えやすいものです。ですから、研究を通して、「子どもたちが成長した」「保護者や地域から評価された」といった喜びを実感してもらえるように、発表の機会を設けたり、子どもたちや保護者からの評価をきちんと先生方に伝えたりすることも校長の役目だと考えています。

校長 関口純一先生

ミドルリーダーの役割

先生方が前向きに研究に取り組めるように、常に見通しを持って進めるようにしています。そのため、年間の研究計画を立てる際も、会議ごとに話し合う内容や準備すべきことを示し、会議の時間を最大限に生かせるように工夫しました。課題が明らかになった時は、「このような考え方はどうか」と具体的に提案し、参加者の共通理解を促すようにしています。先生方が団結して教育活動に当たれるよう支援するのが私の役割だと思っています。

研究推進委員長 石川賢治先生

ICT機器で学び合いを促し 子どもの考えを更に深める

山形県 寒河江市立高松小学校

新課程では、教科指導でのICT機器活用など情報教育の充実が示されている。寒河江市立高松小学校は、ICT機器を使うことにより、子ども同士の学び合い・高め合いを引き出す工夫を凝らしている。授業と家庭学習を連動させるツールとしても、ICT機器の可能性を模索している。

未来を生きる子どもたちに 付けたい力

価値観の多様化、グローバル化が進む中
異質な人たちと文化の違いを乗り越えて
共に社会をつくる「共生力」

高度に情報化した社会で
ICT機器を道具として使いこなせる力

新課程を踏まえ 大切にしている取り組み

- ◎ 1人1台のタブレットPCや大型の電子黒板を活用し、考えを共有・理解することによる「学び」の深まり
- ◎ 互いの良さの発見と課題解決につながる「学び合い」の授業の展開
- ◎ デジタル教科書、教材、情報端末などを利用した指導方法の開発

◎ 背景

幼少時から集団が固定化し なかなか殻を破れない

山形県の中央部に位置する寒河江市は、さくらんぼの産地として知られ、豊かな自然に恵まれた土地だ。寒河江市立高松小学校の子どもたちの家庭は、祖父母と同居する三世代の兼業農家が多い。祖父母を中心に、子どもの見守り隊が結成されるなど、家族ぐるみ、地域ぐるみで子どもたちを育てようとする気風がある。

同校の普通学級は6学年全て1学級で、転出入をする児童はほとんどいない。子どもた

S c h o o l D a t a

◎1874(明治7)年に開校した八楯・谷沢の両学校が前身で、130年以上の歴史を持つ。2010年度から総務省「フューチャースクール推進事業」、11年度から文部科学省「学びのイノベーション事業」の実証校。



校長 伊藤順一先生

児童数 142人 学級数 7学級(うち特別支援学級1)

所在地 〒990-0525 山形県寒河江市大字米沢643-2

TEL 0237-87-1022

URL <http://academic3.plala.or.jp/takamatu/>

公開研究会 2012年11月20日(火)(予定)

新課程2年目の学校づくり——未来を生きる力を育むために

ちは、幼少期から小学校卒業までずっと同一の集団で過ごすことになる。このため、「勉強が得意なのはAさん」「走るのが速いのはB君」というように、集団の中での役割が固定化されてしまう面があると、伊藤順一校長は説明する。

「子どもたちは素直で明るく、言われたことは真面目に取り組みます。宿題をしてこない子どももほとんどいません。その反面、自分の殻を破ってまで力を伸ばそうとする意欲が、若干足りない傾向が見られます。中学校に進学すると5つの小学校から子どもが集まってくるので、更に社会に出たらもっと多様な人とかかわり合いながら社会を構成することになります。子どもが大人になった時、どのような力が大切になるのか。本校では、自分の考えを主張できること、相手の話を耳を傾けられること、そして、互いの立場を考えてより良い社会をつくっていくことの3つであると捉え、子ども同士が学び合い、高め合うことによって、自ら伸びていくこととする子どもの育成を目指しています」

◎取り組み内容 意見をICT機器で分かりやすく示し 子ども同士の学び合いを促す

子どもの実態と新課程での趣旨を踏まえ、同校が大切にしているのが「学び合い」だ。「新課程では、言語活動や体験活動、道徳

など、7つのポイントが示されました。これらを意識して取り組むことが私たちに求められています。これもこれもと取り組んでいては、10年後に振り返った時、結局、何も変わっていないことになりかねません。本校では学び合いを柱とした教育計画を組みました。自分の考えを持ちつつ、他者の意見を合わせてより良いものをつくっていきける力を子どもたちに付けたいと考えています」（伊藤校長）

そのために活用しているのがICT機器だ。2010年度、総務省の「フューチャースクール推進事業」の実証校に指定されたのをきっかけに、同年度には、全校児童に1人1台のタブレットPCと、全普通教室に77インチの電子黒板が配備された。更に、校内のどこでもインターネットに接続できる無線LAN環境なども整備された。教務主任の石澤紀雄先生は、ICT機器の位置付けを次のように説明する。

「一般的に、ICT機器での学習という機械と勉強しているというイメージが強いかもしれませんが。しかし、本校では『人と人がかかわる道具』の1つと捉えて学習に取り入れています。タブレットPCや大型電子黒板を使い始めてから約1年半経ちますが、子ども同士の学び合いの場面で効果的に使われるようになりました」

例えば、子どもがタブレットPCに書き込



寒河江市立高松小学校校長
伊藤順一 いとう・じゅんいち
「子どもや保護者、地域から信頼される学校をつくりたい」



寒河江市立高松小学校
教務主任。ICT機器の活用を推進している。
石澤紀雄 いしざわ・のりお
「お互いのかかわり合いを大切に出来る子どもを育てたい」



寒河江市立高松小学校
研究推進員、4学年担任。ICT機器の活用を推進している。
石山志保 いしやま・しほ
「子どもがタブレットPCに書いた内容を、教師は自分のPCだけで見ることが出来る。」

んだ内容を、電子黒板にほぼ同時に表示できる機能がある。電子黒板を4分割にすれば4人の内容を比較でき、9分割にすると9人の画面をパツパツと変えながら見比べることが出来る（P.20写真）。一度に複数の子どもを考えを比べられるメリットは大きいと、4学年担任の石山志保先生は話す。

「子どもは他の友だちの考えを即時に知ることが出来ます。そして、その時に気付いたことも自分の画面に書き加えられます。机を動かすなどの作業が減った分、話し合いや一人で考える時間が増え、子ども同士の学び合いを促し、子どもにより考えを深めさせることが出来るようになりました」

子どもがタブレットPCに書いた内容を、教師は自分のPCだけで見ることが出来る。

*プロフィールは取材時（2012年3月）のものです



写真 2年生の国語の授業の様子。9分割された電子黒板には、子どもが書いたタブレットPCの画面が巡回しながら映し出されていく

「モニターを見れば、何も書いていない子どもが誰かがすぐに分かるので、効率よく一人ひとりを指導できます。更に、教師が机間指導をする時間を他の活動に使えるという利点もあります」(石山先生)

他にも、電子黒板にデジタル教科書を映しながら授業を進めたり、動画コンテンツを流したりと、ICT機器を授業のさまざまな場面で活用している。

「タブレットPCや電子黒板を取り入れた当初は、何でも出来る魔法の道具のように感

じていました。しかし、実際に使ってみて分かったのは、授業をするのはあくまでも教師だということです。子どもの学びを深めるためには、どのようにICT機器を活用すればよいのか。教師の授業構成力が問われるのです」(石澤先生)

更に、伊藤校長は、学び合いには教師の聴く姿勢も大切だと話す。

「先生は、子どもに問い掛けて正解が返ってくる、『しめたもの』と思ってしまうがちです。しかし、正解だけを求めていると、子どもは次第に話さなくなったり、教師が求めていることを考えて答えを言おうとしたりするようになります。それでは、子ども同士の学び合いや高め合いにつながりません。大事なのは、子どもが『間違ってもいい』『この先生なら聞いてくれる』という安心感を持つことです。そのために、先生方には『とにかく子どもの話を聞いてください』と伝えています。『間違えてくれたから、みんなが考えることが出来たね』というところから学び合いが始まるのです」

授業と家庭学習の連続性を生み出す取り組みに着手

授業でICT機器の活用を2年間進めてきた同校が、12年度から模索しようとしているのは、ICT機器を活用して家庭学習との連携を進めることで、子どもの学びをより深め

ることだ。

「社会科でごみの学習をする時に、タブレットPCに付いているカメラでクリンセンターの写真を撮影してきたり、インターネットでごみについて調べてきたりする子どもが出てくることでしよう。家庭で学んできたその内容を次の授業で共有することによって、他の子どもも勉強の進め方が分かり、学びが更に深まるという好循環が出来ることを期待しています」(伊藤校長)

伊藤校長は、子どもが予習をし、その内容を踏まえた授業の実現を視野に入れる。タブレットPCを家庭に持ち帰り、インターネットに接続すれば子どもたちは家庭学習ができると共に、教師はその様子を把握できるようになっている。前日の家庭学習状況を踏まえて、次の日の授業を組み立てることも可能だ。

「授業の終わりに次の授業で行う問題を提示して、『次はこういう勉強をするよ。ちょっと解いてきてみて』と、次時への導入を試しています。例えば、算数では、家庭学習で立式が出来ていなければ、問題文が分からないことが想定されます。逆に、立式が出来ていれば、授業で問題文に戻らなくても答えの求め方を重点的に指導すればよいかもしれません。ICT機器を使うことによって、授業のサイクルを少し変え、家庭学習と学校の学びを新しいスタイルでつないでいけないかと考えています」

新課程2年目の学校づくり——未来を生きる力を育むために

ICT機器に限らず、家庭との連携は強化していく方針だ。家での読書やノーテレビ・ノーゲームによる家族の会話を促すなどの取り組みを進めていく。この取り組みを推進する校務分掌として「連携部」（仮称）の設置も検討している。

同校は、12年度、新課程に掲げられた体験活動と言語活動の関連付けにも力を入れる。例えば、5年生の社会科における米の学習では、これまでは米の「生産」が目的だったが、「売り上げを寄付する」を最終目標にすることによって、学習に変化が生まれた。売るためにどうすればよいのか、ネーミングやチラシ作りなど、言語活動にも関連した活動となった。こうした取り組みを今後、充実させていく考えだ。

●学校経営の工夫 担任の力を引き出す 同僚性を大事にしたい

石澤先生は、担任が自信を持って教育活動に当たれるように支えていきたいと話す。

「新課程では、授業時数や学習内容が増え、教科書も変わりました。加えて、本校ではフューチャースクール推進事業などもありました。先生方にとって大変な1年ではありましたが、チームワークで大きな成果が得られました。2年目も、出来るだけ先を見通した計画を示し、授業をより良くしていきたいと

思います」

同校には、元々ICT機器に詳しい教師がいたわけではない。教師の平均年齢は約52歳と高く、ICT機器の扱いがあまり得意ではない教師がほとんどだった。石山先生は次のように振り返る。

「ICT機器については、ほとんどの教師がゼロからのスタートでした。『使いこなせるか』と不安でしたが、本校に常駐するICT支援員や外部の大学教授らの支援を受けながら、職員室で日常的に情報交換したり、校内研究会を開いたり、試行錯誤を続けました」

教師全員が力を合わせ、悩みながらも取り組んできたという経験は、教師の同僚性にも結び付いている。

「本校は、教師も子どもも人数が少ないです。一人ひとりの存在感が大きくなります。『互いの良い点を学んでください』『言いたいことがあるば、遠慮せずに話してください』と先生方には伝えていきます。良いことも気になっていることも互いに話せるような同僚性によって私たちが成長していかなければ、子どもたちが伸びるはずがありません。子どもたちの個性が豊かなように、教師も得意な分野はそれぞれ違います。互いにカバーし合うことを大事にしなから、2年目も新しい課題にチャレンジしていきたいと思います」（伊藤校長）

学校をつくり、動かすチームワーク

校長の役割

学校の主人公は子どもであり、子どもたちを導くのが担任の役割です。ですから、子どもと毎日向き合う担任が教育活動しやすい環境を、私たち校長や教頭、主任が整えていくことが大事です。校長が目的をしっかり示し、教頭が目的に向かって進む手段を決め、教務主任はいつ、どのように行うのか具体策を決め、そして、実際に子どもを引っ張っていくのが担任です。こうした連携を大切にして学校経営に当たっています。

校長 伊藤順一先生

ミドルリーダーの役割

教務主任の役割は、校長や教頭と担任の先生方をつなげることです。私は、先生方にとって、小さなことでも質問したり、困ったことがあったら相談したりしやすい存在でありたいと思っています。

そのため、年間計画など先の見通しを具体的に示すことによって、「忙しいけれども楽しい」という雰囲気をつくることを、大切にしています。

教務主任 石澤紀雄先生

将来必要になる力から逆算し 今、実践すべき教育を考える

玉川大教職大学院教授、国立教育政策研究所名誉所員 小松郁夫

社会が変われば、小学校に求められる教育も変化する。10年後、20年後を考えた時、社会の変化に合わせて小学校教育はどのように変わっていくべきなのか。今後求められる指導について、玉川大教職大学院の小松郁夫教授に聞いた。

本来の小学校の役割と現状の課題

経済・政治・社会的役割を 果たすための力を付ける

これからの小学校教育を考える前提として、社会の変化に左右されない、学校本来の役割は何かを整理することから始めましょう。私は「経済的役割」「政治的役割」「社会的役割」の3つであると考えます。

経済的役割は、子どもに就業能力を育てることです。学校は、経済状況や産業構造の絶え間ない変化を捉え、それを教育に反映させ続けなければなりません。例えば、特に創造力が求められる社会であれば、その土台となる力を小学校の段階から育てる必要があるの

です。

政治的役割は、社会に出るまでの準備段階として、子どもに政治や社会の仕組み、憲法などについて教え、政治に関心を持ち、参画していく能力を子どもに育むことです。

そして、社会的役割は、文化やスポーツなどの人生を豊かに過ごすための素養を育てることだと考えます。

しかし、現在の学校の状況に目を向けると、社会の急速な変化が1つの背景となり、これらの役割を十分に果たしきれない部分があるように思います。

例えば、少子化による学校の小規模化が進行し、1学年1学級の学校が増えているという現状があります。学校の統廃合も進んでい

ますが、地域から小学校がなくなることへの住民の不安などもあり、統廃合をして学校規模を保つという選択はしにくい場合もあります。小規模化が問題なのは、集団による学びのスケールが小さくなり、多様な価値観の中で考えを深める力を育成しにくくなるからです。こうした実態を踏まえた新しい学び方を考える必要があります。

次に、地域差はありますが、教師の若年化が急速に進んでいます。経験の浅い教師が増えることで、教育の質に影響が出る可能性があります。一方で、若手の先生は新しいことに挑戦する意欲が強い傾向にありますから、転換期を迎えた現在の小学校教育にとってはプラスに働くのではないかと、私は考えています。

また、「学び合い」などでグループ学習を取り入れることが増えてきましたが、まだまだ教師の指導が主体の一斉授業が中心です。欧米では座れるように床がカーペットだったり、机にキャスターが付いたりして、子ども同士がグループ学習をし、コミュニケーションを取りやすいスタイルが主流になっています。社会全体が義務教育に対して画一性や公平性を求めているため、学校や自治体が独自性を発揮しにくいという現状もあります。ICT機器や設備面を整備し、学びの目的に応じて柔軟に授業を組み立てられる環境を整えるべきだと考えます。

新課程2年目の学校づくり——未来を生きる力を育むために

これからの小学校に求められる指導

子どもが互いの多様性を尊重し 学び合える指導を

現状と今後の社会の変化を踏まえ、これからの学校にはどのような指導が求められるのか、改めて考えてみましょう。

グローバル化や高度情報化といった昨今の社会の流れを考えると、それらの知識を基盤とした「考える力」を育む指導がより強く求められているのは自明です。それは新学習指導要領にも記されています。端的に言えば、**求められる指導が「量」的なものから「質」的なものへと変化しているのです。**



こまつ・いくお◎国立教育政策研究所高等教育研究部長 早稲田大学大学院客員教授 イギリス・パーミンガム大教育学部客員研究員などを経て現職。専門は学校経営学、教育行政学、学校論、文部科学省「学校評価の推進に関する調査研究協力者会議委員・副座長なども歴任。著書に『新しい公共』型学校づくり（共著・ぎょうせい）など

例えば、出来事の年号を覚えるよりも、その出来事が歴史の中でどのような意味合いを持つかを考えさせるなど、歴史的な見方をより重視する授業があってもよいでしょう。欧米では、算数の授業で電卓を使ってよいとする設問があります。計算力を鍛えるのではなく、考える力を育てるのがねらいであれば、そうした指導の方が効果的な場合もあるでしょう。

今の小学生が社会に出る頃には、ますますグローバル化が進み、異なる文化や価値観を持つ人と協働する場面が増えるでしょう。そうした社会を生きる力を付けるために、自ら考える力を育て、基礎・基本をしつかり習得

させることは重要です。しかし同時に、子ども一人ひとりの違いに目を向け、考えさせたり表現させたりする指導にも力を入れる必要があります。

新学習指導要領では、言語活動などを通して、子どもが伝え合う活動が重視されています。しかし、同じ内容を同じ方法で学ぶだけでは、子ども同様に「伝える」必然性が生じません。違いや個性を意識させてはじめて「自分の考えを伝えたい」「相手の考えを聞きたい」といった欲求が生まれます。そのようにして異なる考えが刺激し合うことで、1+1から2以上のものが生み出されるのです。

将来から逆算して考える 「バックキャスト」の思考

日本では昔から教科の編成が変わっていません。しかし、現代では、学問や知識、技術が統合的になっていきますから、思い切った教科を再編するという視点も必要ではないでしょうか。例えば、イギリスや韓国の小学校ではICTが必須教科であり、職業技能としても重視されています。このままでは日本が世界から取り残されてしまう危険性も否定できません。

社会が大きく変化しつつある今こそ、学校に求められるのは、先に将来の環境を想定して目標を設定し、今、何をすべきかをさかのぼって考える「バックキャスト」の思考です。

*プロフィールは取材時（2012年3月）のものです

目の前にいる子どもが社会人となる10年後、20年後の世界を考え、その頃に必要になる力を想定して教育内容を組み直していくことが必要であると、私は考えています。

家庭・地域との連携

家庭・地域とのつながりを「支援型」から「協働型」へ

教育内容の変化によっては、学校だけでは出来ない活動も増えますから、今後は家庭や地域との連携がますます重要になるでしょう。最近、「家庭や地域の教育力が落ちた」と言われるのを時々耳にしますが、私はそうは思いません。ただ、学校から「子どもにどのような力を付けたいのか」という見通しが示されていないため、家庭も地域もどのように動いたらよいか分からないのではないのでしょうか。だからこそ、学校が家庭や地域とデジタルを共有して、共に子どもを育てていく意識を持つことが大切だと思います。

家庭・地域とのつながりには、「支援型」「連携型」「協働型」の3つのレベルがあると考えています。

「支援型」は、家庭や地域が「サポーター」となっている状態です。この段階では、学校が保護者や地域住民にお願いし、さまざまな協力を受けることとなります。家庭・地域の側は「学校と共に子どもを育てる」という意

識が希薄なため、協力を求められることが多いと「学校からお願えばかりされている」という不満が募るかもしれません。現状では、多くの学校がこの支援型にあるのではないのでしょうか。

それより一歩先に進み、学校と家庭・地域がデジタルを共有し、それぞれの役割を自覚しながら協力し合うのが「連携型」です。例えば、「元気にあいさつの出来る子どもを育てよう」という目標を立て、学校と家庭・地域がそれぞれ出来ることに取り組むような状態といえるでしょう。

最終的に目指したいのは、学校と家庭・地域がコラボレーションをする「協働型」です。この段階になると、協働によって教育を「共創（きょうそう）」することで、新しい教育の形が生まれることが期待できます。例えば、地域の企業に積極的に協力してもらおうことで、学校だけでは出来ない、社会を知る学習活動が作り出せるかもしれません。

教師本来の役割を意識し 学校外の力を活用する

このように、家庭や地域との関係を発展させていくためには、「教室で子どもと向き合う」という教師の本来の仕事を残し、それ以外は良い意味で従来の学校の形を崩して、学びの場を広げていく意識を持つとよいでしょう（図）。例えば、外国語活動は地域のサポー

ターに、ICT教育はコンピューターの専門家に任せる、家庭科の授業に地域の高齢者に入ってもらふことなどが挙げられます。テストや補助教材などは、全国展開によってスクールメリットを生かして作成している外部業者の力を借りるのもよい方法でしょう。

また、ICT化の進展により、以前と比べて子どもや保護者とのコミュニケーションの取り方も変わりました。携帯電話やメールによって瞬時に大勢の人とつながれるのはメリットの1つでしょう。一方で、こうしたICT化や既製教材の充実などにより、教師と子ども・保護者の関係が希薄化しやすくなっていることを危惧しています。

例えば、保護者が何か用事で学校に来たとしましょう。普段は電話で話すことが多くても、「せっかくだから、お子さまの様子を見ていきませんか」と教室まで案内するような心配りをすれば、学校への信頼は増していくでしょう。便利なものは活用しつつも、温もりがあり、顔が見えるつながりを大切にします。子どもとも保護者とも、人間関係を直接構築していくことが大切なのです。

日本でも警備や給食などの分野で民営化が進んでいます。イギリスでは昼食の指導員や昼休みのグラウンドの監視員なども人員をパートで雇い、教師はゆっくり昼食をとっています。こうした方法でも、教師の多忙さを多少軽減できるかもしれません。

新課程2年目の学校づくり——未来を生きる力を育むために

家庭との連携では、学校が家庭学習にいかにかかわるかも考えなくてはなりません。分らないことは自分で調べ、工夫して学習する家庭での自学自習は、学習塾とは異なる大切な学習活動です。小学校の時から自ら学ぶ子どもを育てるために、家庭と学校が十分に連携する必要がありますでしょう。

先生方への期待

縦と横の2つの視点を持ち 教育界の外側に目を向ける

今後の学校教育を考える上で、校長を始め管理職の立場にある先生には、「縦」と「横」の2つの視点を持っていただきたいと思えます。縦の視点は、日本や世界がどのように変化しているかを、過去から現在、未来へと続く「歴史的な視点」を持ち、知識として学ぶことです。そして、横の視点は、海外での旅行や生活を体験したり、グローバルな情報を獲得したりして、狭い世界にとどまらず、「比較的な視点」を持つことです。

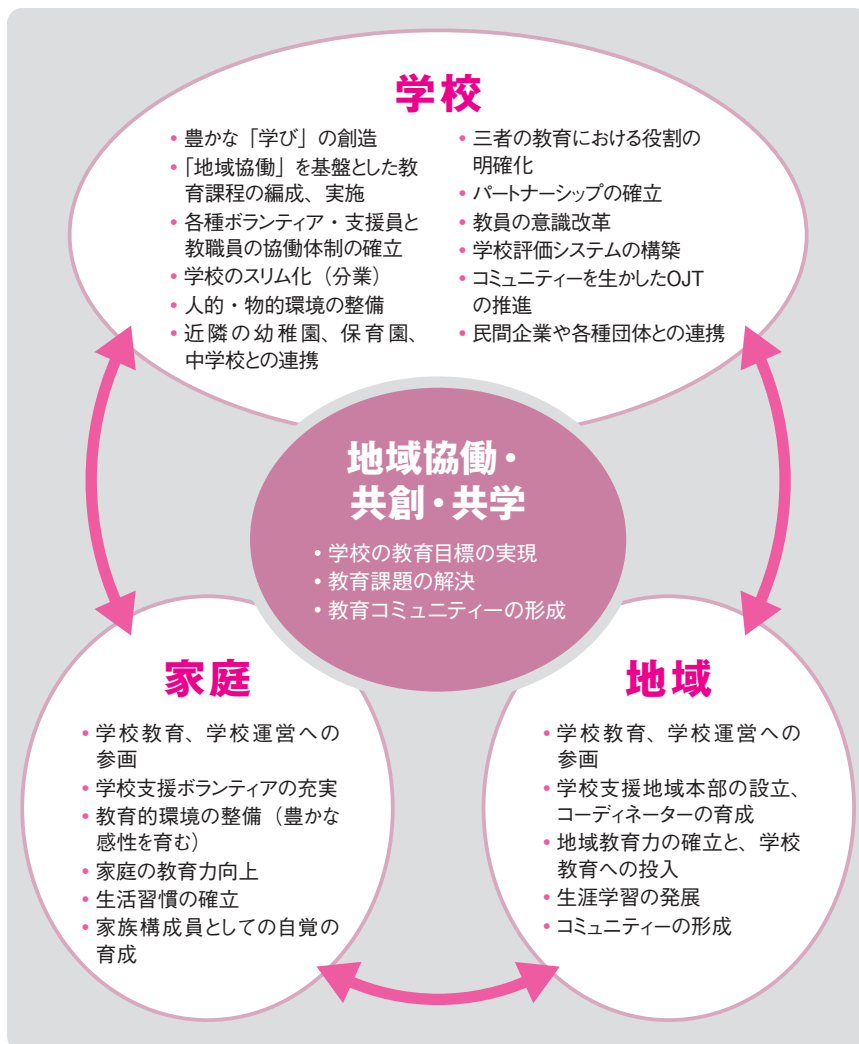
教育界そのものは限られた世界ですが、家庭や地域を通して、多くの人や業界に接することが出来ます。内向きにならずに外に意識を向ければ、さまざまな世界につながるネットワークを持てるのが、教師という職業です。教師自身が多様な価値観を受け入れることで、子どもの見方や指導も多様になります。

教師が変われば、子どもが将来、多様な価値観が混じり合うグローバル社会を生き抜ける下地も育まれるでしょう。

また、若手教師が新しい活動に挑戦することを支えるのも、管理職の重要な役割です。我々大学も、教師を育てる立場として、これからの時代に合った新しい指導法をしっかりと身に付けさせて現場に送り込みたいという気持ちで取り組んでいます。

教師の面白さは、いろいろな世界に羽ばたく子どもの準備期間に携われることです。自分の育てた子どもたちが、10年後、20年後に世界で活躍することを考えれば、教師が素晴らしい仕事であると改めて感じるのではないのでしょうか。世界とつながり、未来をつくり出す仕事であることに誇りを持ち、その面白さを積極的に享受することも、より良い教育の体現のために大切なことだと思います。

図 新しい学校運営の創造



*小松先生の資料を基に編集部で作成



今回のテーマ

若手教師の指導力を高める工夫

若手教師の占める割合が増えている今、その育成は学校にとってこれまで以上に大きな課題となっている。学校全体の教育活動は、経験の長短を問わず、教師一人ひとりの指導力を総合することによってつくられるからだ。今号は、若手教師が個々の課題を解決することで、指導力を身に付けている研修の事例を紹介する。

事例

大阪府大阪市立清水丘小学校

若手教師が見出した課題を学校の課題として話し合う

4人の教師が課題を見つけ
それに応じた研究部会を設ける

大阪市立清水丘しみずがおか小学校は20〜30歳代前半の教師が約半数を占める。こうした若手教師の指導力を高めるため、2011年度は教職歴4年以下の教師4人が自分の課題を設定し、解決することを校内研修の1つに位置付けた。田村泰宏校長は、研修のねらいを次のように説明する。

「新採であっても、子どもの前に立てば一人前の教師であり、一人で授業をすることが求められます。そ

こで必要となるのは、課題を見抜く力、課題を解決する力です。これらの力を養う、いわゆる『課題解決学習』に教師も主体的に取り組むために、この研修をデザインしました」

研修では、6〜8月を課題設定、9月以降を課題解決に向けた話し合いと実践に充てた(図1)。

課題設定に当たっては、感じた課題や目指す指導などをワークシート(図2)に記入。田村校長はこれを学校の課題に結び付けるために、さまざまなアドバイスをを行った。

「若手の課題を学校全体の課題と

し、ベテランの先生も共感できるようにすれば、若手研修を全体研修に出来ると考えました」

教務主任の小原正先生は研修の統括者として、若手教師の相談に応じ、日常的な指導を行いながら、課題が整理しやすくなるように働き掛けた。

「私も各課題が学校の課題に結び付くように助言し、ベテランの先生にも指導をお願いしました」

課題は、3人が学習指導(国語と算数、図工、表現活動)、1人が学級づくりと決まり、それに応じて4つの研究部会を設けた。管理職と教

務主任を除く全教師がいずれかの部に属し、月1回、課題を解決する手立てを話し合った(図3)。

若手教師の自立を更に確かなものにするために、人脈をつくる大切さも味わわせた。学外に指導者を求め、指導を受けるようにした。

小原先生は、研修の成果を次のように話す。

「全員で話し合う習慣が生まれ、先生方が互いの思いを交流させる場が増えたと感じます。先生一人ひとりの指導力を高めることで、力のある学校になっていくと思います」

図1 研修の流れ

研修の段階	時期	研修内容
課題設定	6月	●研修開始 ●ワークシートに記入
	7月 ～8月	●田村校長と面談(2回) ●他の教師からアドバイスを受ける ●課題設定
課題解決	9月 ～1月	●4つの研究部会を設け、月1回話し合う ●外部人材に協力を求める
	2月	●「メンターの活用による若手教員の育成」をテーマにした研究発表会を開催

*同校の資料を基に編集部で作成

ワークシートには教師自身が感じている課題(○)と、それを見た田村校長からのアドバイス(□)が記入される。一人よがりになることなく、ふさわしい課題を設定させるねらいだ

図2 ワークシート(A先生のもの)

清水丘小学校若手教員育成プログラム 1 課題の設定
清水丘小学校の研究に即した研修になる点で学校の課題に結びつく。

なまえ()

こんな力を伸ばしたい!

こんなことに興味がある
こんな力が自分にはある!

こんなことができればすばらしい
こんなことをするにはどうすれば?

授業力をつけること
授業をする上でのポイントやコツ
指導者として留意すべき事
立ちふるまい
してはいけない事

授業の見学や指導をしていただき、授業の改善をしていければ

ベテランの先生方の指導を中心に

どんな授業をしたいのか?
清水丘小学校の研究テーマを意識すること
ともに学びともに育つ算数が学習
～すべての子どもの言語活動に焦点をあてた授業の研究～

こんな力を伸ばしたい!

授業で生かせる力

国語と算数の両方を意識しながら授業作りを工夫する。(国語で育てた力を算数で活用充実させる。)

*同校の資料をそのまま掲載

図3 若手教師4人の課題

	課題	課題設定の理由	課題解決に向けての取り組み内容
A先生	国語と算数の授業力の育成	教職歴1年目で、3年生の国語と算数の授業を担当。子どもをもっと引き付けられる学習指導がしたいと感じていた	以下の点について、研究部会内で話し合い、算数教育の研究者に話を聞いた ・一問一答にならないような発問の仕方 ・具体物を掲示するなどの教材や教具の工夫 ・板書を整理するための、チョークの使い方 など
B先生	友だちと学び合う図工の学習	クラスに1人、全盲の子どもがいる。その子どもが主体的に参加できる授業を目指していたが、特に図工の学習指導が難しく、改善したかった	全員が授業に参加する意義を、研究部会内で話し合う。また、特別支援学校を訪問し、教材について具体的なアドバイスを受けた
C先生	それぞれの力を最大限に活用した表現活動	クラスに1人、肢体が不自由な子どもがいる。その子どもに主体的に表現活動をさせるにはどうすれば良いかが課題だった	研究部会内での話し合いで、クラスの子どもの互いの努力を認め合えるよう、学級掲示物を工夫する方針を固める。肢体の不自由な子どもを、いかに掲示物作成に取り組ませるかについて、特別支援学校に話を聞きに行った
D先生	最高学年の学級づくり	相手の気持ちを考えずに自分の考えだけを通そうとする子どもがいるなど、クラスとしての団結力で課題があった	研究部会内での話し合いや、他校の教師に話を聞くことで、教師が子どもとなるべく多く、長くかかわることを心掛けた。週3回、15分休みに全員で遊んだり、全ての授業で話し合い活動を取り入れたらした

*同校の資料を基に編集部で作成

School Data

大阪府大阪市立清水丘小学校



◎1943(昭和18)年開校。大阪市の南部に位置する。地域やPTAとの連携が盛んで、ゲストティーチャーとして授業への協力が行われている。男女平等教育や環境教育、情報教育などの研究も進めている。

校長 田村泰宏先生
児童数 482人 学級数 17学級(うち特別支援学級2) 教員数 24人
所在地 〒558-0033 大阪府大阪市住吉区清水丘2-9-41
TEL 06-6673-1101
URL <http://www.occe.ne.jp/es/simizugaoka-es/>
公開研究会 未定

*プロフィールは取材時(2012年3月)のものです



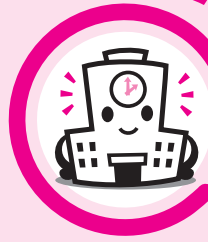
大阪市立清水丘小学校教務主任
小原正
おはら・ただし
「全員が気持ちよく教育・研究に取り組めるように、声を掛け、相談に乗るようにしている」



大阪市立清水丘小学校校長
田村泰宏
たむら・やすひろ
「若手もベテランも共に学び、指導力を高め合える雰囲気、学校につくっていきたい」

授業研究に学校全体で主体的に取り組むために「心掛けていこう」と

つながる



学校と家庭の学び

夏休みも継続する学習習慣を 保護者と教師の連携で目指す

滋賀県草津市立南笠東小学校

草津市立南笠東小学校は、子どもの自主学習の習慣化に取り組んでいる。保護者向けに声掛けの例を示したプリントを作ったり、担任と保護者の懇談会を夏休み前に設けたりしたことで、取り組みを始めて1年ほどで、約9割の子どもが毎日学習をするようになったという。

生きる力の育成の二環として 自主学習を習慣化させる

滋賀県南部に位置する草津市立南笠東小学校には真面目で元気な子どもが多く、友だちとの関係も良い。ところが、学力面で課題があったため、全学年共通の学習規律を設け、教師全員が学習指導のポイントをそろえる「教師のルール」を作るなど、以前から学力向上に力を入れてきた。その結果、学力は安定してきたが、文部科学省の「全国学力・学習状況調査」の結果から、自分で計画を立て

て勉強したり、宿題以外の家庭学習に積極的に取り組んだりする子どもが少ないことが見て取れた。そこで2010年度から、子どもが自分で課題を見付けて学習する「自主学習ノート」の取り組みを行っている。片山善久校長は、これを生きる力を育成するための活動と位置付けていると説明する。

「社会では、自主的に課題を見付け、解決する力が求められます。教師の指示を待つだけでなく、自ら学習に向かう習慣を子どもに付けさせてこそ、生きる力の育成という小学

校の役割を果たせると考えました」

子どもの課題を共有して 家庭学習に取り組ませる

11年度は自主学習を含めた1日の学習時間の目安を学年×10分間とし、次のように取り組みを充実させた。

■宿題を「家庭学習」と改称

毎日の宿題を「家庭学習」と呼ぶことにした。このねらいを、教務主任の高井育夫先生は次のように話す。「授業での学習内容を定着させる

には授業に合わせた学習課題が必要ですが、子どもにとって『宿題』と

いう呼び方には、担任から与えられた課題というイメージがあります。

そこで『家庭学習』と言うようにし、子どもに『自分のための学習』という意識を持たせようと考えました」

■「家庭学習の手引き」の配布

子どもに自主学習を促すためのものとして、子ども向けと保護者向けの2種類の「家庭学習の手引き」を作成した。教務部がひな形を作り、担任がクラスの実態に応じてアレンジし、4月に配布した。

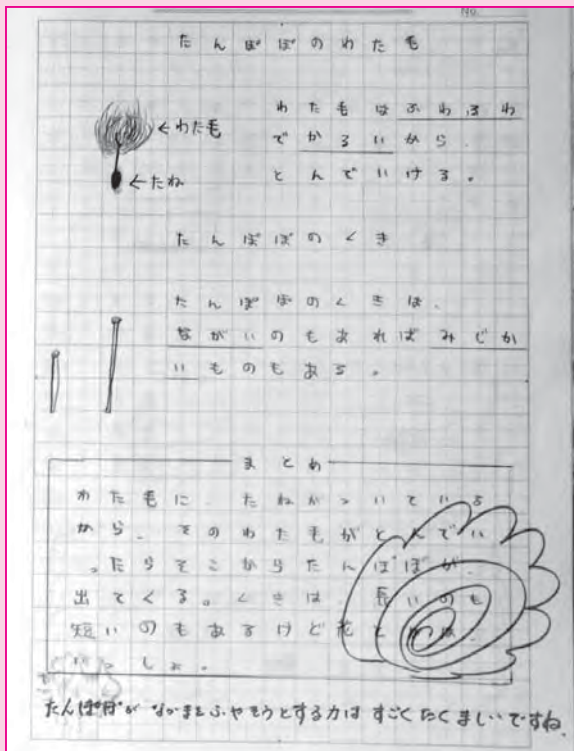
子ども向けは低学年用、中学年用、高学年用に分け、発達段階に応じて

自主学習内容を例示。漢字の書き取りや計算練習に偏らないよう、日記や調べ学習などの例も載せた。

保護者向けの手引きには、「毎日、決まった場所で決まった時刻に取り組みさせる」「静かな場所で、姿勢を良くして集中させる」など、保護者の声掛けのポイントをまとめた。

■「自主学習ノート」(図1)の実施
自主学習専用のノートを配布し、毎日取り組むよう呼び掛けた。基本的に週1回、担任が子どもから回収するが、提出は任意とした。

図1 子どもに返却された「自主学習ノート」(5年生)



「丸付けやコメントを書くなど、何らかのチェックをして子どもに返すよう、先生方に伝えています。『先生がノートを見てくれる』という気持ちが、子どもの学習意欲につながるからです」(高井先生)

*同校の資料をそのまま掲載

「子どもの自主性を引き出すことが目的ですから、自由に取り組みさせています。内容も教科学習に限定していません。お手伝いはもちろん、たとえ遊びであっても、自分から積極的に取り組んだことなら、感想を『自主学習ノート』に書くよう、子どもに伝えていきます」(高井先生)

特色がある自主学習は、学校だよりや学級だよりで紹介する。「友だちがどのように学習しているかを知れば、子どもは刺激を受け、自分も工夫しようと感じるはずだ。」

また、保護者は優れた実践を見ることで、子どもにアドバイスしやすくなるかと考えました」(片山校長)

■夏休み中の自主学習を充実させる
仕組みの整備

まず、年1回の担任と保護者との個別懇談会の時期を、10月から夏休み直前に改めた。担任は1学期の成績を見ながら、子ども一人ひとりの習熟度と、これからどのような学習が求められるかを保護者に伝える。

「校長として、担任はなるべく早く子どもの学習面での課題を保護者と話し合うべきだと考えています。また、懇談会の内容を踏まえて保護者から子どもに具体的に声を掛けてもらうことで、夏休み中の子どもの学習を充実させるというねらいもある。」

りました」(片山校長)

教務部は担任に対して、「保護者にリラクセスしてもらうため、教師は正面ではなく斜め前に座って保護者と向き合うこと」「成績など具体的な資料を示すこと」「学習課題を中心に話すこと」など、懇談会での留意点をプリントで示した。

「どの先生にも自分の言葉を保護者に受け入れてもらえるような環境を整え、ポイントを絞って話し合っ

てほしいと思いました」(高井先生)
更に、子どもに向けて夏休み専用の「家庭学習の手引き」(P.30 図2)を作成・配布。自主学習の例だけでなく、お手伝いの例なども示した。4年生以上には夏休み専用の「自主学習ノート」を配布する取り組みも

滋賀県草津市立南笠東小学校

◎1989(平成元)年開校。近隣の大学から研究者を招き、理科の実験を行うなど、学力向上の取り組みが盛ん。2005年度から3年間、科学技術振興機構の「理数大好きモデル地域事業」の指定を受けた。

校長 片山善久先生
児童数 419人
学級数 16学級(うち特別支援学級2)
所在地 〒525-0071
滋賀県草津市南笠東4-4-1
TEL 077-562-9540
URL <http://www.minamigasa-p.sk.ed.jp/>



草津市立南笠東小学校校長

片山善久

かたやま・よしひさ

「管理職である前に、一人の教師として子どもと触れ合い、成長を見守りたい」



草津市立南笠東小学校

高井育夫

たかい・いくお

教務主任。「今、自分が置かれた状況で最善を尽くすことの大切さを伝えたい」

*プロフィールは取材時(2012年3月)のものです

図2 夏休み専用の「家庭学習の手引き」(6年生用のひな形)

ながいと思い ついついなまけ
やっぱり後悔して すぎてしまう
どうせやるなら みのあることを

6年 組 ()

夏休みの課題 必ずやるのは次の6つです。
ノートを1冊わたします。次の課題をしましょう。
①ドリルの復習 計算ドリル4 6 7 8 9 10 11 12 13 14
15 16 17 18 19 20 21 22 23 24
漢字ドリル7 13 19 27 29 35 41 43 (まじっつ練習
49 50 51 (背けるように練習しておこう))

②第2次世界大戦(太平洋戦争)の時の日本の様子を、自分でテーマを設定して調べ
例えば「戦争当時の人々の暮らし」「親子関係の度下と広島、長崎の被害」
・中岡や豊田に対する日本軍の行為 ・戦争が始まった理由と、戦争
調べる方法
新聞の切り抜きをたたく
戦争に関する本を読む
テレビのニュースを録音してまとめる など
8月6日、8日、15日の前後はテレビのニュースや新聞などで特集があります
2学期に発表しますから、みんなが聞いてもわかる言葉でまとめましょう。

③組み立て体験に向けて、いくつかの個人技をできるように練習する。
(立ちアタック、遠投、背面開投、など)

④夏休みの日記(夏休み新聞にまとめて)

⑤リコーダー、及び鍵盤ハーモニカの練習 曲名「コンドルは飛んでいく」

⑥読書感想文(絵巻、理科の自由研究から一つ選択して取り組む。
「もちろみんくつやってもいいのですが...」)

これ以外に、自分で考えて自主的に学習を進めよう(こんなことできるヒント集)
基本レベル
・読書帳を買ってきてやる・短文・作文・教科書の問題をもう一度復習する

・小説・漫画(読んだ本の紹介文つき)・本の練習(なわとび・一輪車・マラソン)
・新聞雑誌の練習などなど

応用レベル
・ポスター作り・工作・写生・習字
・お世話になっている人、なつかしい人へのお礼より・短歌、俳句作り

達人レベル
・地域の探検(志内、理内)記録の作成・自分の家でキャンプ・お料理
・なにかの教室へ参加する・おうちの方が働いているところの見学

プロフェッショナルレベル
・登山・歩いて、または自転車でまわる長距離一周・一人でいく小旅行
・百人一首をすべておぼえる・読者4冊(1日1冊)

家のお仕事を手伝おう 必ず一つはやりましょう。
できれば続けられるものを
(こんなことできるヒント集)

基本レベル
・新聞の取入れとゴミ出し・食器洗い・お風呂干し・洗濯・ゴミ出し
・洗濯物のとりこみ・窓掃除・お風呂そうじ・ゴミ出し・買い物
・靴まいた仕事をする(お手伝い)

応用レベル
・洗濯(使う、干す、とりこみ、たたむ、かたづけ)
・お風呂仕事(そうじ、わかす、そうじ)・ご飯炊き(未洗い、炊く)
・おみそを作る・田舎の仕事・家のそうじ(はく、ふく、掃除機)
・車を洗う・くつを洗う・みか

達人レベル
・家の修繕・みそや川のそうじ・近くの公園のそうじ
・3度の食事の用意

プロフェッショナルレベル
・一人で家事を全部やってみる・家中のワックスかけ

自分で考えて取り組むことが身につくようになってきたとはいえず、やっぱりなつかしいことです。途中でへこたれることもやっぱりあるでしょう。でも、途中でへこたれても、自分で考えてやっただけだから、罰をほって目標達成できることだと思います。

*同校の資料をイラストを削除して掲載

どの子どもも取り組みやすくなるよう、自主学習とお手伝いの内容例を、難易度によって4段階に分けて示している。ひな形では「基本レベル」「応用レベル」「達人レベル」「プロフェッショナルレベル」だが、担任は各段階にキャラクターの名前を付けるなど、目の前の子どもを引き付ける工夫をする。「実態に応じて子どもの学習意欲を高めるようにすることが、担任の腕の見せどころだと考えています」(高井先生)

子どもの変化を見ることで
保護者の学校理解は深まる

取り組みを始めて1年ほどだが、

始めた。また、学習に課題がある子どもには、家庭との連携を密にし、登校日を設けながら、夏休み中も担任が学習状況を見取った。

以上にまで上がった。

学習に対する子どもの姿勢は大きく変わった。それは、子どもへのアンケート調査の結果にも表れている。11年4月には家庭学習を全くしない子どももいたが、12月にはどの子どもも毎日30分以上取り組みようになり、予習・復習をする子どもは9割

保護者からは、「子どもを褒める機会が増えた」といった声が目立つ。「自ら進んで机に向かっている努力を保護者に認められれば、子どもはうれしいはずです。『もっと頑張ろう』と、更に学習意欲を高めていくと思います。いわばプラスのスパイラルがつくられていると感じています」(高井先生)

片山校長は、今後について次のように話す。

「『自主学習ノート』のチェックや個別懇談会、夏休み中の家庭訪問などは、先生方にとって負担と感ずる部分があるかもしれませんが、しかし、子どもの実態をしっかりと把握し、それを保護者と共有してこそ、家庭と学校との信頼関係は築けるのです。そうならば、教師の負担も減っていき、と思います。教育活動に対して家庭からの協力を今後も得ていくためには、現在中心になっている先生が異動しても充実した活動を続けられるよう、体制を整えていくことが求められます。取り組みの改善と継続によって保護者の理解を深め、学校と家庭が共に子どもを育てる関係を今まで以上に強くしていきたいと考えています」

夏休み前の学級活動でお使いいただける副教材を無料でご提供します

ベネッセは2007年度から「家庭学習に関する冊子」などを先生方やご家庭に無料で提供する「学び応援プロジェクト」を実施しております。2011年度は、のべ約15,000校から約110万冊ものお申し込みをいただきました。

2012年度は、高学年の児童向けに、夏休みの上手な過ごし方を指導いただく際に役立つ副教材や、本選から読書の習慣を付ける工夫を紹介した冊子などを無料でご提供いたします。ぜひ貴校の教育活動にお役立てください。ただ今、申し込み受付中です。詳しくはホームページまたは本誌同送のチラシをご覧ください。

学校&家庭 学び応援プロジェクトホームページ <http://www.benesse.co.jp/manabiouen/>

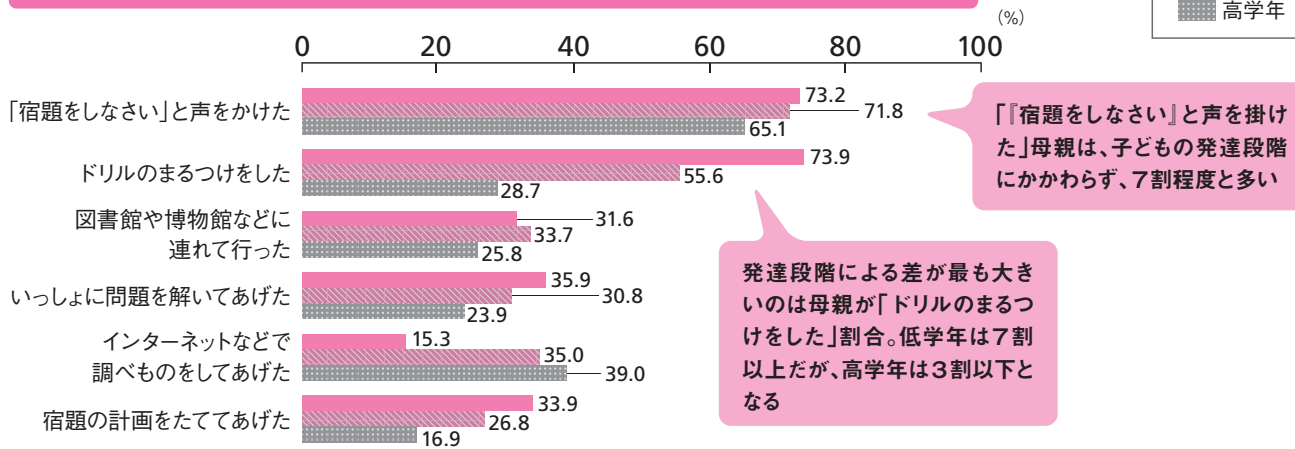
未来に進むちからを育むプロジェクト。
ベネッセの学び応援

申し込み締め切り
2012年
7/13(金)



発達段階にかかわらず、7割が宿題をするようにと声掛け

夏休みの宿題への保護者の関与(回答:小学生の子どもをもつ母親)



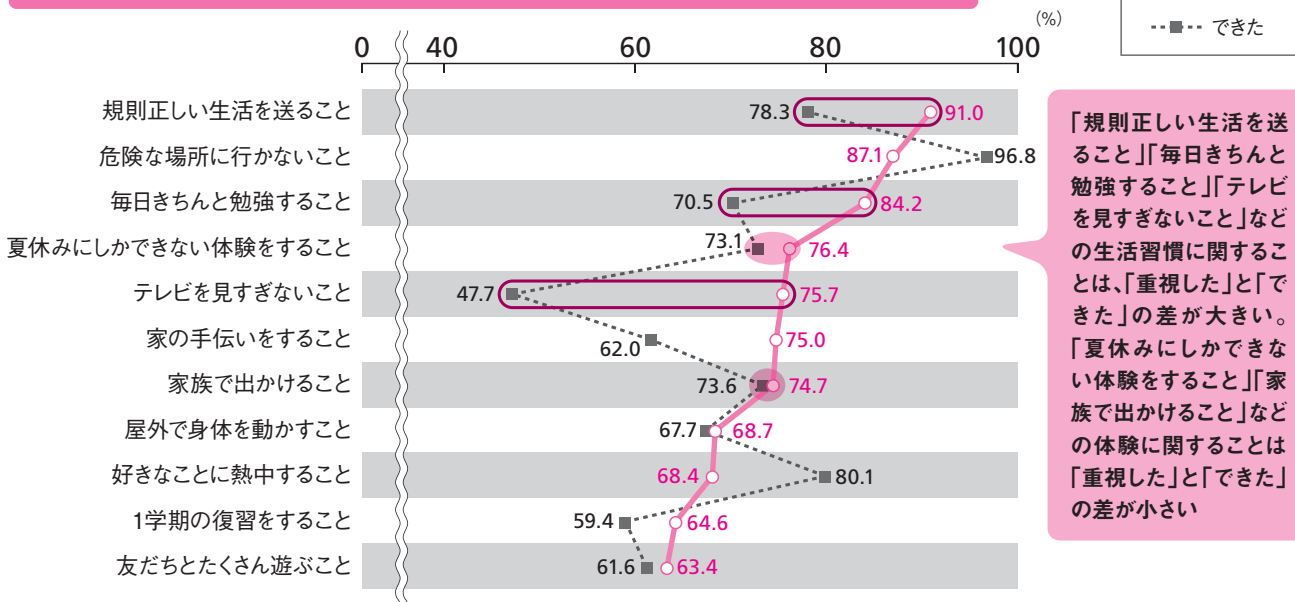
注1) 複数回答

出典: Benesse教育研究開発センター「小学生の夏休み調査—小学生の保護者を対象として—」(2010)

調査時期は、2009年9月、調査対象は全国の小学1年生～6年生の子どもをもつ母親4,644人(774人×6学年)、調査方法はインターネット調査

母親が重視したわりに出来ていないのが生活習慣の定着、 ほぼ出来ているのが体験活動

夏休みの過ごし方(重視したこと/できたこと)(回答:小学生の子どもをもつ母親)



注1) 「重視した」は「とても重視した」と「まあ重視した」の合計

注2) 「できた」は「十分にできた」と「ある程度はできた」の合計

出典: Benesse教育研究開発センター「小学生の夏休み調査—小学生の保護者を対象として—」(2010)

調査時期は、2009年9月、調査対象は全国の小学1年生～6年生の子どもをもつ母親4,644人(774人×6学年)、調査方法はインターネット調査



上記の関連データはコチラ!
<http://benesse.jp/berd/>
*「調査・研究データ」コーナーをご覧ください

2011 Vol.4 特集「小中接続—子どもの学びを中学校へつなぐ」へのご意見

このコーナーでは、編集部に寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

*「VIEW21」小学版のバックナンバーは「Benesse教育研究開発センター」ウェブサイト (<http://benesse.jp/berd/>) でご覧いただけます。

◎異校種間では、互いの取り組みを直接見合うことが「百聞は一見に如かず」で極めて大切であることを、対談の記事で再認識しました。そして、参観から更に一步先へ進み、互いに感じ取ったことを伝え合うこと、相手側に求めていくことと、自分側に求められることなどをしっかり重ね合わせることの重要性を学びました。「教育は連続性」ということをかみしめる機会となりました。

[埼玉県／H小学校／K・K]

◎対談にあるように、「小学校の教師は、中学校3年間の学習内容を頭に入れた上で指導することが理想」です。しかし、部活動や生徒指導などが壁になり、教師の小中交流は活発になりません。小・中を経験することで、少なくとも自分の専門教科では9年間の連続性が見えてくるようになると思うのですが……。

[長野県／M小学校／S・K]

◎愛知県阿久比町立英比小学校の事例で、「小中9年間の重点指導事項の作成」が、今後必要になると強く感じました。また、「欠落なき教育」、「段階なき教育」、「落差なき教育」もなるほどと思いました。

[愛知県／K小学校／H・M]

◎鳥取県北栄町立北条小学校の「きずな」・「まなび」プロ

ジェクトが印象に残りました。小中連携というと、型にとられやすいと思いますが、「きずな」プロジェクトのように、小学生が「自分もあんなお兄さんやお姉さんになりたい」と感じられる連携になることが理想だと思います。

[東京都／S小学校／T・N]

◎小・中の連携の重要性は分かりますが、行き詰まり感があることも確かです。私は小・中の両方で校長を務めましたが、壁を破れないでいます。東京都世田谷区立太子堂小学校の「1ウィークプレ中学生」は素晴らしい実践であり、参考になりました。2012年度の教育計画の中で、本校にも取り入れてみたいと思います。

[岐阜県／I小学校／H・N]

◎本中学校区でも、小・中の教師の意識のずれの大きさを感じていました。小学校教師は「大切に児童を育てたのに中学校でだめになっている」、中学校教師は「基礎・基本の力を付けて送り出してほしい」というように互いが不満を抱いていたのです。しかし、2011年度からコミュニティ・スクール推進指定校区となったことで、先生方の意識が変わり、「児童・生徒を小中の9年間で育てる」を合言葉に前進しています。

[兵庫県／N小学校／K・H]

ご両親を亡くされた
お子さま対象

ベネッセ 通信教育奨学制度のご案内

ベネッセコーポレーションでは、震災や事故などによりご両親を亡くされた日本全国のお子さまに、無償で教材をお届けする「ベネッセ 通信教育奨学制度」を2011年に新設いたしました。お子さまの高校卒業までの家庭学習を、ベネッセの通信教育サービスが全面的に支援してまいります。貴校や周囲にご両親を亡くされたお子さまがいらっしゃいましたら、本制度をお知らせいただけますと幸いです。

◎詳しいご案内は下記サイトをご確認ください

<http://www.benesse.co.jp/mirai/shogaku/>

◎お問い合わせは講座の電話窓口までお願いします
進研ゼミ小学講座 0120-977-377 (通話料無料)

*一部のIP電話からは042-679-8563へおかけください (通話料がかかります)

*受付時間10:00～20:00 (日曜・祝日・年末年始を除く)

未来を生きる 子どもたちのためにできること

教育情報誌『VIEW21』が発刊当初から
変わらず貫き続けている思いです。

日本の学校教育は先生方の「熱意」が支えている。

だからこそ、我々も全力で

先生方に役立つ情報を発信することにこだわりたい。

『VIEW21』は、これからも

全国の先生方と共に子どもたちの未来を見つめ、
今と未来を結ぶ教育を提案していきます。

Benesse® 教育研究開発センター 『VIEW21』編集部

編集後記

今回の特集取材を通し、「新課程において強調されたポイントの全てを一度に取り組みのではなく、自校の状況を踏まえながら1つずつ重点を決めて実行していく」と先生方が話されていたことが印象に残りました。10年後、20年後に社会に出ていく子どもたちに付けたい力を考えて、どのような取り組みができるのか、先生方と共に考え続けていきたいと思っています。今年度もよろしく願っています。(杉田)

VIEW21 小学版 2012 Vol.1

2012年5月21日発行／通巻第32号

発行人 新井健一
編集人 原 茂
発行人 (株)ベネッセコーポレーション

印刷製本 凸版印刷(株)
編集協力 (有)ペンダコ
執筆協力 二宮良太、山口慎治
撮影協力 荒川潤、川上一生
イラスト協力 浅沼リカ、幸剛

◎お問い合わせ先

VIEW21編集部
〒206-8686
東京都多摩市落合1-34
電話 042-311-3391
*3月26日より移転いたしました